

565
215



0001741-000

565-215

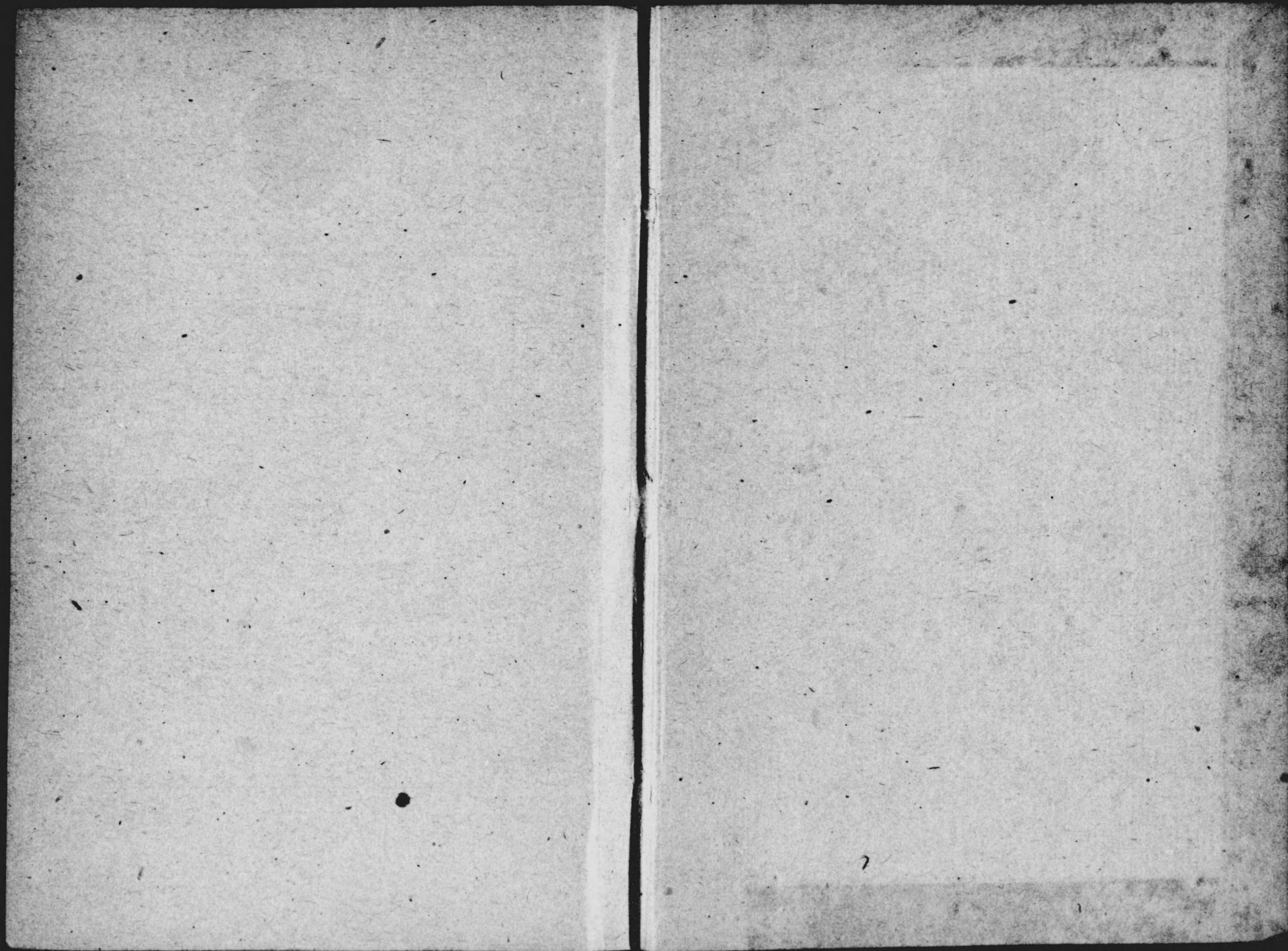
自己発見

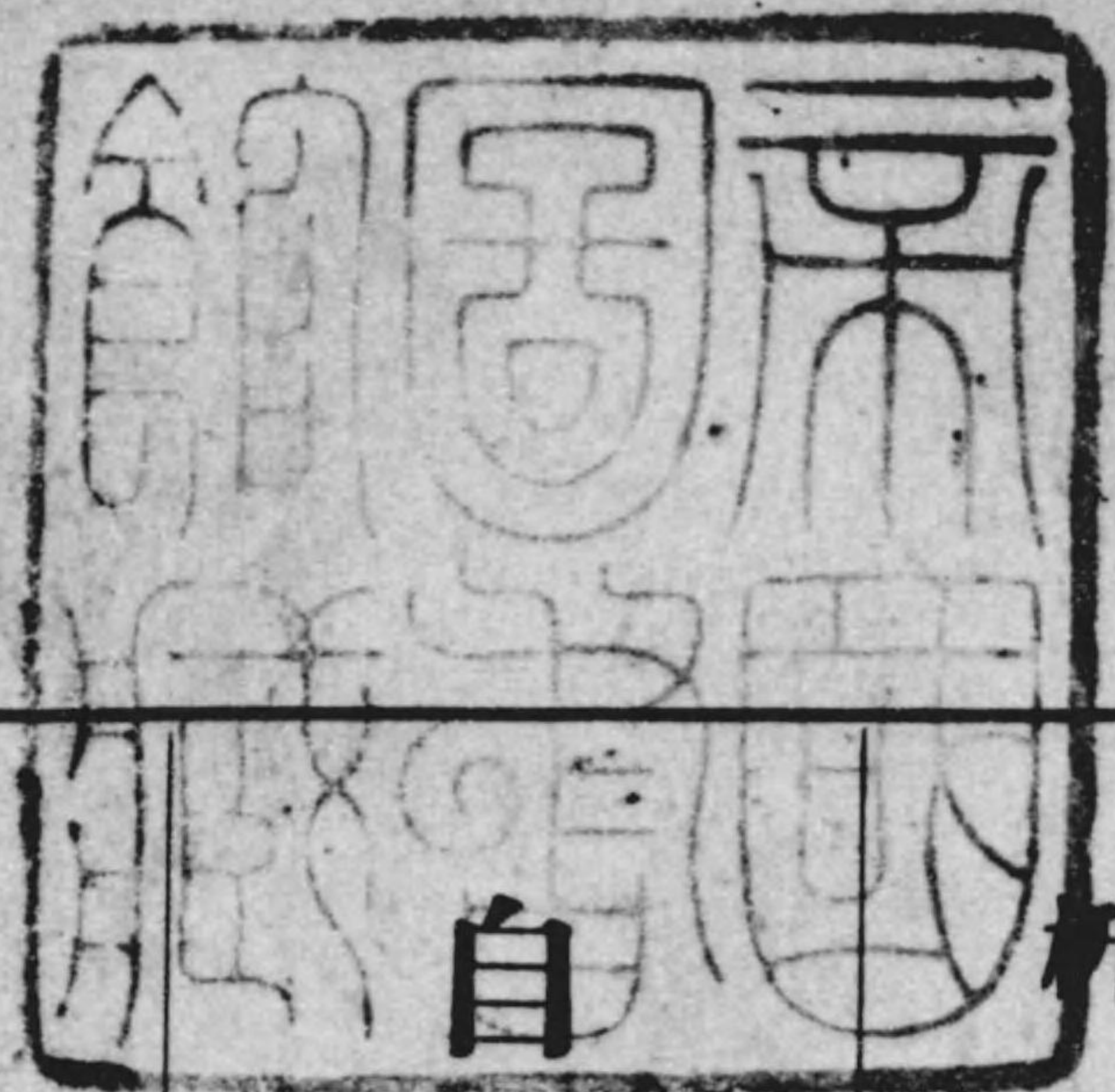
枡本卯平・著

宝文館

昭和2

AAC

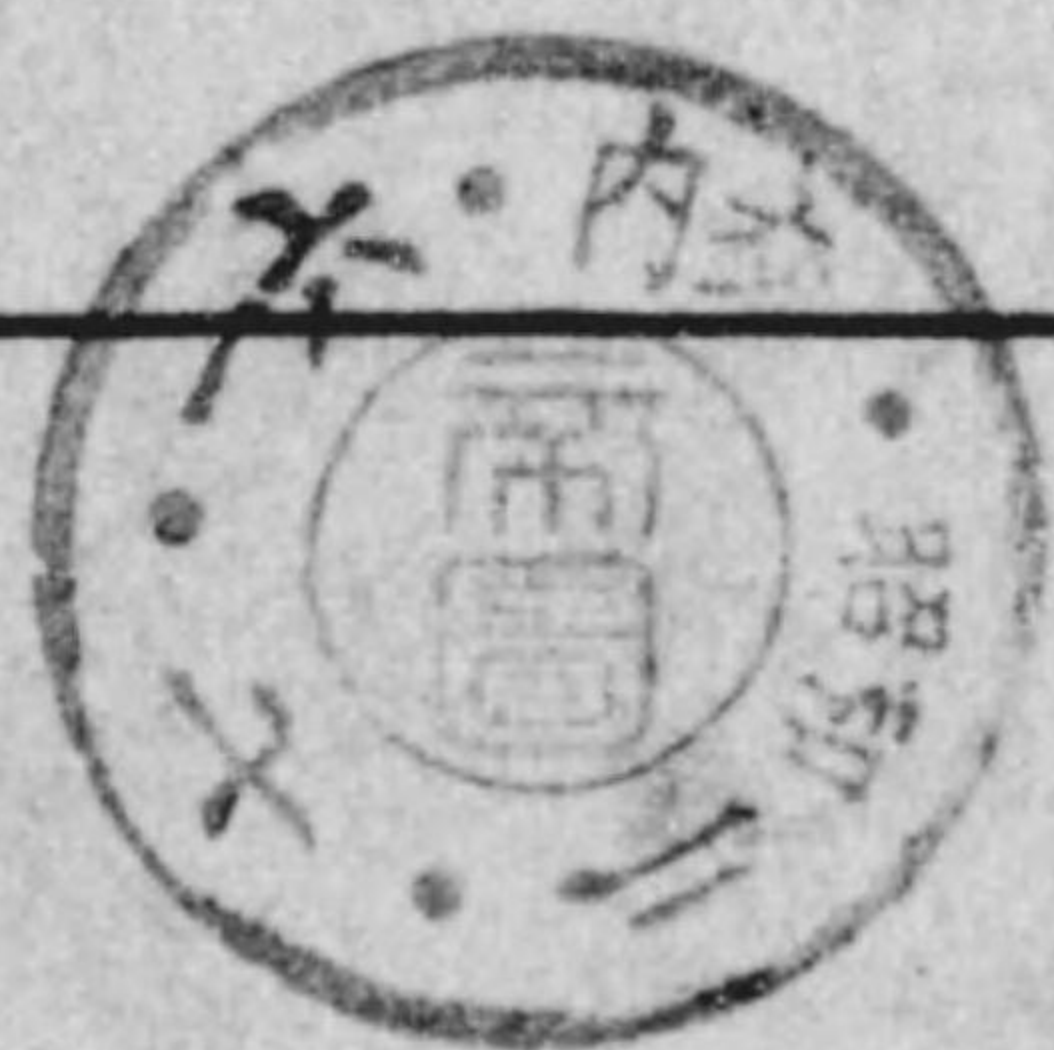




軒
本
卯
平
著

已
發
見

東
京
寶
文
館
發
行



自序

自由は平和の主。國家は平和の楯。楯の内部は自由の天地。その天地が國家の理想として護る平和の社會である。

楯には矛盾の調和が性質附けられる。内部は自由の世界にして、外部は専制の世界である。即ち内は生の極樂若くは天國にして、外は死の地獄若くは魔界である。

日本國家は從來、その國位の必要上、楯の外面に囚はれてゐた。その自然の結果内部の自由は無視された。日本社會に平和の主なき所以である。

平和の主なき社會に、統一の力はない。腐敗分離破壊消滅の悲惨な現象が、社會の一般状態であるのは、止むを得ぬ事柄であらう。

國家は綱紀の弛緩を憂ふ。社會は秩序の紊亂を嘆く。本々その根は楯の内部の平和の主の喪失にある。眞に綱紀の回復、秩序の挽回を望むならば、失はれたる内部

の自由を見出すことが最も主要な道である。

過去の歴史の跡を見れば、専制の下に失はれたる自由の回復は、神軍の力に依つて、見出す外に道はなかつた。けれども、その道は社會に悲惨な跡を留むる。その根本の原因は、自由が生命として形式化されてあつたためである。

自由は平和の主だ。釋迦の極樂の佛。基督の天國の神。二十世紀の社會の自由。三者は共に平和の主である。さうしてその主の實在は何所に求められるかといへば唯各自一身の心の中にあるばかりである。

過去の歴史の尊さは、國家に護らるゝ内部の人間の愚蒙を條件としてある。失はれたる自由の回復は、社會に血を流した神軍の跡を追ふのが能ではない。過去の歴史は悉く形式の奴隷の歴史である。

自由は一身の主だ。その主は心の眞である。人間自然の愛の至情。人間自然の勇の至大。人間自然の心の平和。皆その眞が源である。

専制は楯の外、自衛の武器の危道に役立つ、不安の世界の主である。専制は、形式を本とし、鬼面を尊ぶ。それが過去の歴史の本體である。

専制の世界には嘘が主である。形式鬼面、悉く己の眞を裏切る、自己欺瞞の悪魔である。社會の平和紊亂の本は、この卑劣、臆病神の所爲である。

二十世紀の社會の發見は、失はれたる、自由の回復が、その自然の道だ。その道を先人の足跡に取るのは愚を證明するのである。何かの新たな發見があらう。

二十世紀の新たな社會の發見は、一身の主を見出すにある。その主の本體は心の眞である。それが日本の専制治下に失はれてあつた。自己發見の眞意は唯その一點にある。

自己發見

緒言

私の先生の故侯爵小村壽太郎といふ人は、「女を愛するなら情死を覺悟して愛しなさい、仕事をするにはその魂がなければ駄目です。」かういつて教へる人であつた。

先生は國家主義一天張りで、國威伸張に渾身の努力を拂つて、一生涯恨みなく、一身を國家の楯の外面に捧げつくした。

私は先生の志を繼ぐ。その志は一つであるが、方面は反對である。私は國家の楯の内面に渾身の努力を拂ふ。

先生は國威の伸張に努力して、專制の一面に身を投じた。私は國力の充實に努力して、自由の一面に身を投ずる。情死の覺悟は共に一つである。

大正三年先生の死後三年忌に、自然の人小村壽太郎に筆執つて、自身序文を綴つ

た際、大戦後の日本は寒夜の孤兒を想像させられた。今日大正を改元して昭和の元號に對する刹那、日本は迷兒の觀を與へる。自分を知らず自分の道を知らぬ日本は孤兒の迷兒をつくりである。

日本は明治大正を経て、長い間の自己破壊で、とう／＼自失の悲境に陥つたのである。自己破壊に本づく自失の悲境は、確に生死の岐路である。

死は絶對、言ふに足らぬ。生は相對、幸か不幸かの二面ある。不幸は言ふに足らぬ。幸は如何にして達し得らるゝかといへば、自己破壊の終局に於て、物と形を超越した、自己發見に依るのである。

大正に別を告げ、新元號を迎へて、諒闇の悲しみに、東北産業視察の歩を止め、國民的日本の自己發見の産幕に籠つた。さうして産み上げたのが、本書である。

本書の趣旨とする眼目は、孤兒の迷兒に、自分を知らせ、自分の道を自分で發見する、中心の光を發せさす一點である。

本書を題して自己發見といふ。天地も、一國も、一家も、一身も、立場の異なる自己である。さうして、それらの自己を統一する中心の主は、自己の内面の平和な自由の神である。自己發見は、この意味に於て、孔子の仁の新たな道である。

岩手縣花卷温泉にて

昭和二年一月十一日

著者 榊 本 卯 平

自己發見目次

自序

緒言

第一章 日本民族の中心……………一

第一節 明治維新の大過……………一

第二節 重大事件……………四

第三節 絶對統一の中心……………七

第四節 理想の主……………二

第五節 民族的自己破壊……………一

第六節 失はれたる主の回復……………一

第七節の民族的自己發見……………二四

第八節 王政維新の完成……………二八

第九節 第二維新……………三三

第十節 新元號の實……………三七

第二章 日本民族の社會……………四一

第一節 民族的生命の延長……………四一

第二節 民族的生産……………四四

第三節 神國の表面……………四九

第四節 日本社會の弱味……………五四

第五節 日本社會の神社佛閣……………五八

第六節 日本社會の學者……………六二

第七節 日本社會の自分……………六七

第八節 日本社會の民衆……………七三

第九節 日本社會因襲的缺陷……………七六

第十節 日本社會組織の内容……………八一

第三章 日本民族の國家……………八五

第一節 民族的血の保全……………八五

第二節 民族的至情の發揮……………九一

第三節 維新の大義……………九四

第四節 官憲の邪道……………九八

第五節 日本官憲の自覺……………一〇三

第六節 國家の鞍替……………一〇七

第七節 國家の正道……………一一二

第八節 國家生活本位の國家……………一二七

第九節	社會生活本位	一三一
第十節	絶對の相對	一三六
第四章 日本民族の血		
第一節	貨幣問題	一三二
第二節	人口問題	一三六
第三節	性問題	一四二
第四節	性的女性中心主義	一四八
第五節	男女兩性の働	一五三
第六節	住宅問題	一五六
第七節	食糧問題	一六一
第八節	都市問題	一六六
第九節	墓地問題	一七〇

第十節	土地問題	一七四
第五章 日本民族の生活		
第一節	二重生活	一八一
第二節	貴族的生活	一八五
第三節	成金生活	一八九
第四節	民衆生活	一九四
第五節	デモクラシー	一九九
第六節	階級闘争	二〇三
第七節	政 黨	二〇八
第八節	國民的神軍	二一三
第九節	共產主義	二一八
第十節	個人主義	二二三

第六章 日本民族の産業

第一節 自給自足主義 二二九

第二節 産業組織の歴史的缺陷 二三四

第三節 誤れる産業組織の自由 二三八

第四節 産業的企業家 二四三

第五節 労働者階級の遺傳 二四八

第六節 生産者の魔物 二五三

第七節 生産者の無自覺 二五七

第八節 政府の無責任 二六三

第九節 産業立國の基礎 二六七

第十節 産業組織の歴史的延長 二七三

第七章 産業の組織的革新 二七九

第一節 地方的産業統一 二七九

第二節 地方的自然と歴史 二八三

第三節 産業的日本の脊椎 二八九

第四節 産業的日本の二大重鎮 二九六

第五節 太平洋問題の刺戟 三〇一

第六節 産業的社會の中心 三〇六

第七節 産業組織の靈肉一致 三一一

第八節 産業社會の物質的寺院 三一六

第九節 産業組織の二面の働 三二二

第十節 産業社會の教育機關 三二七

第八章 産業的國家の特徴 三三三

第一節 平民的君主 三三三

第二節 産業的覇道の雛型 三三八

第三節 産業的國家の龜鑑 三三九

第四節 同業組合の本質 三四八

第五節 國家の求むる産業組合 三五三

第六節 株式會社 三五八

第七節 産業的小國家の分化 三六三

第八節 勞資問題の自然の傾向 三六九

第九節 國家的日本の民衆心理 三七五

第十節 産業的國家の佛教 三七九

目次終

自己發見



日本民族の中心

明治維新の大過

仁者に敵なし。王者に城なし。之が日本民族の中心であつた。

この民族の中心に 敵を作り、城を作つたのは覇者の力である。覇道の主は日本民族の中心とは相容れぬ。明かにそれは相容れぬ敵である。

徳川幕府三百年の覇道を破壊し、日本民族の古に復り、王政を新にしたのは、明治維新である。明治維新は日本の舊物を破壊した。その功は一面に於て認むべきで

第二節 重大事件

日本民族の耳目に觸れた重大事件の中で、明治大正の御代を通して行はれた二大事件は、幸徳事件と虎ノ門事件である。

以上の二大事件は、民族のために最も悲むべき現象であつた。恐らく天地共に之を容れぬであらう。

併しながら、以上二大事件の所謂重大犯罪者は、之を民族の中心より見るときは共に愛すべき赤子である。問題はその赤子が、さらば何故に、かゝる重大犯行を企てねばならぬ心の持主となつたのか、之であらう。

勿論その内容は、一般普通社會の民衆には、正確な判断は出來ぬ事柄である。けれども、國家と社會との對立的關係の與へた感情が、彼等にかゝる重大犯行を企てさせた、根本動機を起さす力であらねばならなかつたことは、争へぬ事柄であらう。

著者はかく信じて疑はぬ。

古來、國家の大法に觸れ、所謂重大犯行を企てた事例に徴すれば、その犯行者は時代の權力の下に苦しむ、多數社會の民衆に、心を動かされた輩が多い。

世界的にその例を求むれば、基督もその一人であつたであらう。又日本にその例を求むれば、佐倉宗五郎は確にその一人である。その他世の所謂仁人偉人なるものは、縦令國家の大法には觸れざるまでも、時代の權力に苦しむ、多數社會の民衆に心を動かされ、新たな世界の發見、新時代の開展に、力を注がぬものはあるまい。現代世界に洋溢しつゝある、社會思潮の大勢は、結局、時代の權力に苦しめる、多數人民の燃ゆるが如き心情の發露に過ぎぬ。

日本に於ける重大事件なるものゝ動機は、この社會思潮の大勢の影響の他に何があらうか。一口にいへば、國家の誤れる權力に對する、反抗的民心の外、重大事件なるものゝ原因はないであらう。

さらば、國家の誤れる權力とは、何を指して言ふかといへば、それは性惡標準の國法の立方である。國法の前には眞に良心はない。良心なくして良民のあり得べき道理はない。天下舉つて國家を呪ふも、亦國家の招く自然の成行である。汝に出でたるものは汝に返る。國家といへども、この理を脱することは出来ぬ。

國家の權力は、國法の楯に護られてある。その楯の外は悉く惡である。而してその國家の權力が、少數の特權階級に握られる場合には、社會多數の民衆は、悉く惡化せざるを得ぬ理であらう。國家が性惡標準に國法を立てる間は、その權力の誤られ易いのは當然の成行とせねばならぬ。

隨て、現代國家の誤れる權力下に、重大事件の發生するのは、一夫一婦の世の中に淫賣婦を生じ、惡性の病を天下に蔓延さすのと同轍である。

國家は好い。國權も亦宜しい。けれどもその國家に統一的自制なく、又國權に普遍的自由なければ、一夫一婦の産として、世の中に公娼制度の湧き出た例を、凡て

の方面に見出すのである。重大事件も亦その一例に過ぎぬ。

第三節 絶對統一の中心

國家といふ、人爲的な觀念から見れば、國家の主權は統一の中心として、その存在は明かに絶對である。

けれども世界の表面には、その絶對と認められる國家の統一的中心が、數少くないのである。それは事實だ。

この事實に徴すれば、現實の人間社會には、明確に、絶對的統一の中心が、相對的に存立することも、亦事實として認められねばならぬ。

隨て人間社會の事實として、絶對の相對は誤られぬ眞理であることが認められやう。

若しこの眞理に、現實の社會的現象の一つとして認められる、仁人偉人等の心を

動かす、時代権力の壓迫の下に、苦しみつゝある多数の民衆を當てはめて見よ。果して如何なる結果が発見されるであらうか。

社會多数の民衆は、その生の道に於て、幾んど寄りつく瀬がないといつて過言ではない。その一例を現下社會の公娼廢止論について見る。

公娼廢止は人道上當然過ぎるほど明かな問題である。その問題を携へて、實際公娼に面接すれば、公娼は何と言ふであらうか。廢止は眞にありがたい。けれども實際一家急に迫まつた場合、この世の中に千若くはそれに近い、纏つた金を都合して呉れる人間が、樓主の外に誰があらう。樓主は人道から見れば確に鬼だ。けれどもその鬼が、實際の場合には、神であり、且つ佛である。世の中の所謂神、若くは主なるものは、見様に依れば、鬼であり、且つ惡魔である。公娼はかう公言する。

この樓主は、娼妓の肉を賣り、血を吸つて活き、尙その上に、娼妓の身を飾る着類の上前まで撥ねて生きて行く。鬼でなくて何であらうか。

實際公娼は遊廓が地獄だ。そして樓主は鬼である。その公娼が社會に自由に解放される曉には何うかといへば、一家の貧は、國家の課税や、借金の利息で、そのか弱い頸を締め括る。

かゝる婦人の境遇から見れば、一家の主も、一國の主も、共に鬼に取れぬとはいひ得まい。況んや宇宙天地の主に於てをやであらう。

かゝる婦人の心に立ち入つて察すれば、世を呪ふ情に充たされてゐるに相違ない。婦人の一身に若し心の主があらば、その主も亦鬼である。

現在の世の中は、天地の主も、一國の主も、一家の主も、一身の主も、悉くが弱い人間の心には、鬼としての外には映らぬのが事實ではあるまいか。

かゝる世の中の現象は、その根本に於いて何が主たる原因であるかといへば、國家の權力が絶對的に、性惡標準に社會多数の人間を取扱ひ、國法とサーベルとの下に、統一の中心を不安に陥れるからである。

統一の中心は普遍にして且つ相對であるのが自然だ。地球上の一事一物、有形無形悉く自己統一の中心を有つ。而してそれは互に宇宙の萬有引力で絶對の相對的立場に在つて、自己の保全を維持してをる。

國家の中心は理想として絶對の權力を有つ。併しその絶對の權力は、獨り必ずしも絶對な國家主權のためではないのが理想の本體である。その絶對な理想の主權は國家の中に存在する、多數のか弱い人間の保全のために働くのが、理想の核心である。その國家の中心が、誤られたる權力の下に、恐怖の種子となつて、人道から見て全く下道の地獄に等しい、遊廓の樓主と等しく、か弱い婦人の心に映るに至つては、天下何ものも之より非道理な事柄はないであらう。

第四節 理想の主

理想の主は絶對な力の持主である。人間が古來神に信仰を捧ぐる所以は、神に絶對

な力の存在を認むるからである。

勿論、その力の働は、絶對でなく、相對に相違ない。相對なればこそ、心だに眞の道にかなひなば、祈らずとも神や守らん、といふ歌の意も人心に首肯される。

結局、神に祈を捧げる個々の人間に、絶對な力を呼び起すに足る、特殊の力あるために、神の力が發揮されることゝはなる。

例へば地球上の一本の髪の毛さへも、地球と絶對な立場に立つて、相對的に相引くといふ、物理上の誤らぬ例證から見れば、無形の人心が無形の神と絶對な立場に立つて、相對的に相引き合ふ働も、亦決して虚妄の説として無視する譯には行かぬであらう。

力は形に存して、而かもそれは無である。人の力にしても、或は物の力にしても或は電磁の力にしても、力は一般に無であるのが自然だ。殊に凡ての統一の中心は力を本位として、無の實在の眞である。

親が子に對する自然の愛の力を見よ。全く無の實在の眞たる言葉の外に言ひ表はし方はないであらう。

又子が親に對する至情の發露する場合を見よ。如何なる言葉を以て之が言ひ表はされるであらうか。子の親に對する至情の發露には、形を標準とし、或は物を本位として、何ものも一切ない。たゞ心に存する無形の眞あるのみである。之を稱して無の實在の眞といふ。

形に依り、或は物に囚はれては、その無の實在の眞は死んでしまふ。形と物とは限りがあるからだ。無の實在の眞たる人間の至情には、絶対に限りがない。形や物で表はされぬ所以である。

子としても、或は親としても、一身の理想の主は、自然の愛の本體として、形や物を超越した、無の實在の眞であることが、絶対必要條件である。

この絶対必要條件は、一般に普遍的統一の主にも亦適用されねばならぬ道理である。

る。

例へば一國の主に對しても、若しその主が、國民を文字の通、偽なく、赤子として認むる場合は、その主は唯無の實在の眞に依つてのみ、國民と同心一體の至情を發揮することが出来る。その以外には、如何なる形式や事物を以ても、同心一體の至情の發揮は空想である。

古來世界の一國の主と稱するものは、形式若くは事物を本位として、その位を維持せんとして、滅亡の運命を餘儀なくされて來た。愚の骨頂である。形式若くは事物に囚はれて、人間自然の絶大の力を發揮させ得る道理はない。それらの愚なる一國の主を、古來霸道の主と稱してをる。遠くは最近歐洲の天地に於て、露西亞帝國を初めとして、獨逸帝國、その他の國が、實例を示して呉れた。近くは日本の鎌倉幕府以來の群雄が、地方に割據して一國の主を夢みつゝ、何れも滅亡の運命を繰返してをる。形と物とに囚はれた、霸道の主たる愚の境涯を脱し得なかつた結果であ

る。

明治維新、日本は舊殻を破壊して、鎖國から新たな環境へ進み出た。その場合、自己を失はず、よく環境の變化に適應して行けたのは、何の力に依つたのかといへば、日本民族固有の中心の力であつた。

言ふまでもなく、その民族固有の中心の力は、形や物を超越した、民族自然の無の實在の眞であつたといひ得るであらう。當時の京都の御所を思へば、誰か之を否定し得やうか。

日本民族の理想の主は、民族自然の心に潜む、無の實在の眞といひ得る。

翻つて顧みれば、その無の實在の眞なる民族自然の中心が、明治維新後、形と物とに囚はれてしまつたのは争への事實である。

一身の中心を失ひ、良心を奪はれた人間は、身に如何なる財寶を纏ふても、却てそれがために不安の因を醸し、恐怖の心を生じ、他に對しては猜疑を起し、脅威を

加へ、壓迫を増す動機となる。社會のか弱い人間でさへ、その自然の結果として、放火殺人の無謀の行爲を演出する。

所がそれが現實に、國家の側にも演せられつゝあるのである。大正十二年九月初旬の出來事として、罪なき幼児が、國家の權力を笠に着た大の男に殺害された事實がある。恐怖に囚はれた國家の致せし現象でないとはいひ得まい。

日本はご上の向ふ所に隨ふ國は尠なからう。その日本に於て、理想の國家の中心が、恐怖の主體であるとするれば、日本國中の人民は、悉く同じ恐怖の主體化せざるを望むといへども、到底出來た話ではないではないか。

第五節 民族的自己破壊

日本社會の思潮には、明かに社會の自覺に伴ふ現象が見出せる。一方には社會方面の側に於て、諸種の社會的運動が行はれると同時に、又他の一方には、國家方面

の側に於て、諸種の社會的施設が企てられる。共に日本に社會の發見されて來た裏書である。

併しながら、それらの社會方面の運動、並に國家方面の施設が、眞に何ものを日本に與へるかは、大なる疑問として考へられねばならぬ。

例へば、社會方面の運動者仲間の頭髮や服裝を一見しても、西洋の形に囚はれた自己破壊の現象が、事實の上に争へぬやうに、彼等の頭の内容にも、同じく、その自己破壊が行はれつゝあることは、確實に認めて可い。何れかといへば、頭髮や服裝の形の上の自己破壊は、寧ろ頭の中の機能の上の自己破壊の反映に過ぎぬ。

一般に自分より高き文化に晒される人民は、必ず自己を破壊する。そしてその自己破壊は有形的な事象から、次第に無形的な思想の上にも及ぶのは普通である。

その自己破壊の自然の成行は、終には自己を形の上に失ふて、終には自滅を招く場合なしとも保障されぬ。

現在日本の社會方面の運動といひ、或は國家方面の施設といひ、形に囚はれた自己破壊の集團的現象と見て差支はない。

それでは、そのまゝに安心してをれるかといへば、たゞ一つの條件だけ附けて置ささへすれば、安心してをれると斷言出来る。

さらば、その一つの條件とは何かといへば、民族の中心に、破壊すべからざる、無の實在の中心を有つ一事である。

個人の實例に徴して見れば、高い文化に囚はれて、自己破壊を行ふ場合、自己を全く失ふて自滅を來たす類と、又自己を見出す類との二種類ある。

自滅を來たす類は、單に形に生きて、無の實在の眞を缺く輩である。かゝる輩は一口に言へば物の奴隷と見做すことが出来る。自由戀愛に生きんとして生きる力なく、終には首をくゝつて自滅を招くのも、或は思想の自由を欲して、不安に囚はれ華嚴の飛沫となつて往生するのも、或は社會的運動の戦線に立つて、互に鬪牛角上

の争に囚はるゝのも、等しく無の實在の眞を缺き、形と物とに囚はるゝ類である。勿論、その他、社會の中には、物質的な資本主義に囚はれて、物の外には何ものをも認めず、自己を破壊すると同時に、社會をも破壊しつゝある輩がある。

現在の國家組織の中堅は、言ふまでもなく、これらの所謂有産階級に依つて構成されてあるといひ得る。歐洲大戰は明かにその有産階級の貴族階級に對する勝利であつた。

新たなる思潮として、有産階級に對する無産階級の運動は、遠き以前に有産階級が、自由主義を標榜して、貴族階級に對抗した運動の二の舞に過ぎぬ。世の中は廻り持ち、時を本位に考ふれば、生物四季の現滅の理に過ぎぬ。

隨て内に無の實在の眞を備へ、絶對無限の生命に活きるものは、如何なる周圍の壓迫若くは破壊の手が及ぼうとも、絶對に自己を滅する憂はない。

否、否、自己を滅する憂のないばかりではない。却てそれがために、形を超越し

た、眞の己を發見し得るのである。

眞の己を發見するには、一度は何うしても、自己破壊の道を踏まねばならぬが自然の理と思はれる。

個人の上に見出せる以上の事柄は、民族を一體として、有機的に見る場合にも、亦眞として取られねばならぬ筈である。

現在日本の國家並に社會の兩方面に於て、形式的並に物質的に、自己破壊を行ひつゝ、終に自滅の運命から脱し得ぬ人々は、確に以上の立脚點から見て、尊敬すべき犠牲者である。

要するに、それらの犠牲者を空に犬死させぬ條件は、民族の中心となつて、如何なる外界の破壊にも、形式的に己を失はぬ、無の實在の主の存在唯一つである。

第六節 失はれたる主の回復

民族の中心といひ、或は又國家の主權といふも、その本體は一身の主の延長である。民族個々に一身の主なく、若くは國民個々に一身の中心なくして、民族の中心を求め、若くは國家主權の尊嚴を求めたからとて、空に歸するは必然である。

日本の現状は、凡てが恐怖に囚はれてをる。民族個々も恐怖に囚はれ、國家の中心も、亦等しく恐怖に囚はれてをる。その根本原因は何かといへば、自己の一身に主の本體を缺くからである。

主の本體を自己に缺けば、縱令有形的な形式は備はつても、無形の絶大な力は無い。

個人としては、物は有つても、却て不安の種子と化して、心は脅威を受けねばならぬ。その必然の結果として、門には前後に警官を置き、それで不足で、猛惡な番犬までも飼養する。

國家の場合はそれ所の騒でない。實は民族の親として、國民を赤子の如く思ひな

がら、その赤子の間を通行される、國家主權の持主は、劍銃の塔を結ばねば、安全が保障されぬといふやうな状態である。

かゝる社會の状態の下に、人間味とか、親子の情とか、そんな尊い自然の力が、何うして社會に湧く道理があらうか。

日本現下の社會状態は、生命のない、枯骨の寄集まり同様の觀がある。

社會を一見すれば、集合した人間の姿は見える。併しながら、その人間の姿を直視すれば、たゞ外形の肉體である。その内容には生命の潑瀾たる氣魄もなければ、又自己統一の中心たる一身の主を缺いてをる。

かゝる社會の組織する國家を思へば、その國家も亦、社會の個人同様に相違ないことが認められねばならぬ道理である。

國家は形式の國家にして、他に對して力はあつても、その力は單に物を本位とした、所謂覇者の力である。

覇者の力は、物の自然の道理に依つて、外部の破壊には打ち勝つ資格が存しても内部の破壊の働を何うすることも出来ぬ。

遠く例を求むるまでもなく、近く日本にその實例は山ほどあらう。徳川幕府の破壊した原因は、黒船襲來のためではなくて、幕府自身の覇道的組織が自から招いた腐敗である。

日本民族多数の人間は、徳川幕府の覇道の下に、一身の主を奪ひ取られてしまつてゐた。さうしてその多数の民衆は、土で造つた人形のやうに、たゞ右でも左でも言はれるまゝに、従順に服従せねばならなかつた。その當時の日本社會の民衆に、一身の主の自覺など、何所を探して求めたからとて、求められさうな筈はなかつた。

所が明治維新の時代に變つて、幕府の組織は破壊すると同時に、王政復古、四民平等の日本と化した。さうして世は薩長の權勢治下の世となつた。何のことはない。

徳川に薩長が交代して、形の變つた専制政治を行ふたばかりである。

その間に、日本民族として、最も注意を要すべき事柄は、天子を京都の御所から江戸城へ奉遷した事柄である。

この事柄は、一時の方便、薩長の政略的行爲であつたことは言ふまでもない。その目的は關東以北の人心緩和であつた。

けれども、その政略の内容から見れば、民族の中心を徳川幕府の古巢に囚へ、日本古來の王道を覇道化した實あることは争へぬ事實である。

この事實は、日本民族全體の立場からいへば、一身の主の喪失と見ることが出来る。それを日本民族は見る事が出来なかつた。薩長の槍手段に眼を潰されたゝめである。民族多数の愚が證明される。

日本民族が社會的に活き、社會的生命を維持するには、厭でも應でも、この失はれたる一身の主を、挽回することが絶対必要條件である。日本民族は個々一身の主

を回復すると同時に、社會的民族の中心を回復することを忘れてはならぬ。

第七節 民族的自己發見

失はれたる主の發見は、一見容易の如くして、決してさう容易な業ではない。人に依つては、形式的な國家主權の持主を幕府の腐つた舊城趾から、他の新たな場所へでも、移し申しまゐらせさへすれば、それで出来るものゝやうに考へやう。そんなことで出来る筈のものではない。

一個人の自己發見でさへ、自己破壊の結果、自己を全く自失する堺を越えて、初めてそれが出来るのである。その間には、自己を消滅させる場合がないとも言ひ得ねば、又それまでには行かずとも、自己を一種の強烈なヒステリーに陥れ、自己判断の力もなければ、自己統制の念も失はれる。普通の場合にそれである。さうして破壊すべからざる無の實在の己に達して、初めて醒めて真如の己の本體が發見出来る。

る。

かういへばそれまでだが、その間には確に死線が横たはつてをる。その死線を踏んで、初めて眞の自己發見は可能といひ得る。

この一身の自己發見の實情は、民族的自己發見の上にも當てはまらねばならぬ、一つの眞理に相違ない。

大正十二年九月一日の關東の大震災は、日本の受けた自然的自己破壊であつた。帝都の慘狀を目撃した人間は、地震の災害、火災の餘害に、心膽を奪はれてしまつた。當時何方よりとはなく、遷都の風説が傳へられた。その刹那の人心の衝動は、想像以上のものがあつたに相違ない。

その衝動は、何が動機で、さう強烈に起つたのかといへば、恐らくそれは社會的洪水の危惧のためであつたと思はれる。

統一の元首を、若しあの場合、帝都から失ふたならば、後は亂脈、何が起つたか

想像は附かぬ。

兎に角、かの場合の事象から推して考ふれば、日本民族の破壊すべからざる無の實在の中心は、何といつても、有形的な國家の中心と一致することが自然のやうに取れる。

日本は明治維新の開國と共に、世界の高い文化に觸れて自己破壊を初めかけた。國家の組織は獨逸に倣ふて、憲法も亦獨逸式に出來たといふ。その當然の成行は、日本民族の中心を、プロシヤ式の王に當てた嫌がある。今日から考ふれば、プロシヤの王は獨逸皇帝の位にあつて、あの通りの始末である。日本憲法の起草者は、今日地下に如何の面目でをるであらうか。

爾來、日本は、急激に英國の民族的中心に心を向けた。その英國は、高い犠牲を拂つて、民族的自己發見を成し遂げた歴史を有つ。それを裏書するものは、英國々會議事堂の床にある銅板である。

併しこの銅板は、佛國巴里のヴェルサイユの廢宮に較ぶれば、まだく犠牲の値段は極めて安いといひ得られやう。

佛國巴里のヴェルサイユは、崩御の遺言に、没後の洪水を豫言された、ルイ十四世の全盛の記念である。佛國はその豫言の通り、ルイ十六世の朝に、革命を起し、元首を斷頭臺にかけ、帝都を流血の巷に化して、民族的自己發見の死線を越えた。

自己發見の道は個人の場合も、個々に依つて異なるやうに、民族の場合には、尙更非常の相違があるに違ひない。

日本民族の民族的自己發見の期は何時か。その時期さへも何時かまだく分りはすまい。神ならではそれを知る力もなく、又その道を豫測する力もないのが當然である。要するに何時この時期が來やうとも、又如何なる道を踏まうとも、民族自然の内容に破壊すべからざる無の實在の中心を失はずに維持することが、自己を消滅

する憂を除く唯一の道である。

第八節 王政維新の完成

明治維新は王政維新を理想として出来た。けれども、明治維新そのものは、決して王政維新そのものではない。何かといへば王政維新の理想に向つた第一歩であつたのだ。

今日から明治維新を考ふれば、維新の運動は、當時鎖國の貴族的社會に於ける非常なる左傾行動であつた。所がそれで幕府が倒れ、鎖國が開け、四民平等の社會に變つた譯であつたのに、それは理想の一端に止まつて、その實は依然として、貴族的社會の連續であり、同時に專制的政治の延長であつた。

一口に言へば、明治維新は王政復古を看板にかけて、徳川幕府を薩長幕府に變装させたまでであつた。

けれども明治維新なるものは、縦令薩長の私怨より出た徳川幕府に對する敵打であつたとしても、その實際の働は、日本民族を本位として、王政維新の第一歩たる働には相違ない。唯明治維新を以て、直に日本民族の王政維新と取るものあらば、それは大なる誤りであることを忘れてはならぬ。

王政維新の根本的理想は何であるかといへば、言ふまでもなく、明治維新で標榜したやうに、四民平等の外にはない。

四民平等とは、デモクラシー、民衆思想の根本義であると同時に、社會主義の理想である。

その王政維新の根本理想の本體並に實現はと訊ねれば、唯己ごのみ答へる外に何ものもない。

四民平等の本體は、各自が自己を見出して、初めて求め得られるのである。随て王政維新の理想の實現は、自己發見の四字につきる。

社會主義者は、社會そのもの、本體並に實在を、何う見てをるかゞ疑問であるが確にそれは釋迦の極樂、若くは基督の天國と異なるものとは認められぬ。兩者は發見の動機に於て同一である。時代の權力に苦める多數の民衆を救ふといふのが、發見の動機だ。

唯異なる所はその理想實現の手段である。言ひ換ふれば、歸する所は自己發見に止まるのであるが、その自己發見への道を異にする。

釋迦の教へた道も、今日から見れば駄目と取られ、又基督の教へた道も、五十歩百歩の相違である。今日の時勢では新たな道が必要とされる。その新たな道を社會主義者は求めてをる。

勿論、自己發見への道は、今日の時勢から見て、社會主義者の選ぶ道しか、他には絶無といふことは出来ぬ。人智の自由は、志ある所必ず道を發見する。隨て各人各様、個人的自己發見の道を見出すやうに、民族的自己發見の道も亦、各異ならぬ筈

の道理はない。たゞ愚なるものは、他人の足跡を踏む丈けである。

日本民族の王政維新の理想實現は、如何なる道を取るべきかゞ疑問だ。その第一歩は已に過去の出来事である。要は第二步を何う運ぶかゞ問題となる。

第一歩の過去の維新を顧みれば、四民平等の理想のために、大名及び特權階級に所有の土地を國家に返上させた。所謂藩籍奉還の行爲である。勿論その代償として特權階級の生活を保障するため、國家はその階級に公債を與へた。

國家の取つたこの行爲は、賦課生活の特權階級を、利息生活のそれに變へたのである。所が賦課の出所も、又利息の出所も、共に一般社會の四民だとすれば、矢張日本は、形の變つた一種の貴族的社會組織を、維持してをる勘定である。王政維新の第一歩の價值は、如何なるものかゞ想像出来る。

來たるべき王政維新の第二步は、利息生活本位の特權階級に、國家の名を以て、再び四民平等への道を歩かすのである。

社會に於ける純然たる利息生活者は、世に所謂、働かずして喰ふ輩だ。俗に言ふ穀潰しである。働くものと相容れぬが當然である。

王政維新の第二步は、言ふまでもなく、利息生活者の整理が主たる目標であらねばならぬ。さうして、實際、社會に働いて、生産方面に努力を拂ふ人間に、平等の幸福を計ることが、國家の取るべき新たな方針でなければならぬ。

第九節 第一一維新

日本民族の社會的進化の道程として、次に取るべき第二維新は、經濟的維新である。明治維新は政治的維新であつた。

日本の過去を顧みれば、明治維新後、帝都は京都より江戸へ遷つて、新たに東京が生まれ出で、中央集權一天張りで、日本の政治は統一、否寧ろ劃一的に行はれた。

國家は統一の主體であり、政治はその統一を實現する機關である。けれども、往統一が劃一と誤られ易い。維新後の日本の政治は形式本位の劃一主義であつたといひ得る。

劃一主義の國家の政治が、中央集權的に行はれた結果は、何うであつたかといへば、一寸法子の丈競べといふことである。何れを見ても統率の頭を見せるものがない。

政黨政派内部の紛争分裂のために、政治は統一の國家的機關たる實がない。その自然の成行は何うかといへば、國家主權の鼎の輕重を社會に知らせる姿である。

事實、日本社會の紙幣の價值は、物價の明確なる表示に依つて分るやうに、二分の一、若くは三分の一に減じてをる。その減じ方は大正年間の事柄である。

尤もその年間に、歐洲大戰の結果として日本に非常な通貨の膨脹を見た。隨て物價は高騰する一方であつた。併し物價は高騰しても、通貨の基礎に信用が堅く、そ

の購買力に變化がなければ、社會生活には脅威はない。社會の活氣は物價が高いに限るといふのが、普通の言草である。

けれども通貨の價値が減じ、紙幣に對する信用が失はれて來ては、社會は經濟的に脅威を受ける。一時日本は歐洲大戰の反動で經濟的國難來まで叫ばねばならぬ有様のやうであつた。それは何のためであつたかといへば、社會の信用減退のためでなかつたとはいひ得ぬ。

日本の紙幣は、名は兌換でも、この經濟的國難來の叫び中から、不換紙幣に變つてしまつた。無理に日本銀行に兌換を迫つて警視廳に引渡された事件まであつた。

この日本の紙幣に就いて起つた社會の事象は、確に一面國家主權の鼎の輕重を、社會に知らしめた事柄である。一口にいへば、紙幣の價値の動搖は、中央集權の國家の鼎の動搖といひ得る。

元來、この動搖の原因は、歐洲大戰に本いつてをる。その大戰の根本性質が、一

言にしてつくせば、四民平等である。歐洲の天地から、貴族的社會組織を一掃する自由主義の有産階級の勝利であつた。

奈翁一世の歐洲大亂後、露、普、奥の三國元首は、當時の四民平等思潮を根絶する目的で、神聖同盟を組織した。その同盟の向ふを張つたのが、英國の有産階級から成る自由主義の勢力であつた。百年後にしてその勝利を完成した形である。歐洲の有産階級は、今や何ものをも、頭上に有たぬ。さうして天下を我物として所有してをる。自由主義全勝の時代といひ得る。

顧みて日本は何うかといへば、日本の自由主義標榜の有産階級は、まだく頭のの上に封建の遺物の貴族を載いてをる。王政維新の不完全さが明瞭に分る。さうして日本の有産階級の前途に横はる暗礁も亦明確に見透せる。

歐洲では、全勝の有産階級が、脚下に新たな無産階級の勃興を見出して、大戰後國際聯盟の名の下に、言はゞ第二の神聖同盟を組織した。資本主義の社會組織維持

目的である。

日本はその聯盟に加入した。さうして國際聯盟の片割れである、國際労働會議に於て、日本は産業上特殊國であることを自白した。その特殊國たるべき眞の事情は、日本はまだ有産階級が、頭の上に利喰生活の貴族階級を戴かねばならぬ境遇だといふ事情である。

國際労働會議に列する日本の雇主側と労働者側とは、共に共同の敵として、利喰生活の貴族階級を認める立場にある譯である。

この點から觀察すれば、日本の第二維新なる行動は、明かに英國のマンチエスター・スクールの行動に取れる。即ち穀物條例の撤廢を主張して、工場主と労働者との兩階級が、地主階級と戦つた、あのマンチエスター・スクールの行動に於ける地主階級に、恰度日本の貴族階級が當る。前者は穀物の關稅で保護され、後者は公債の利息で保護されてをる相違があるばかりである。第二維新が經濟的であり、且つ

立憲的であり得ることは、英國の例から推しても裏書出来る。

第十節 新元號の實

昭和の二字は、書經にある、百姓昭明協和萬邦といふ句から引かれたといふ。新元號として立派な名に取れる。その句の意味を聞いて、百姓昭明の四字が社會悉くその天賦の個性を發揮して、遺憾なく個々の職務に努力を拂ふことだといひ、又協和萬邦の意味が、所謂分權の各地方を、以上の道に依つて、自然に協同和合に導くことだといふのを知つて、確に新元號の目出度かるべきことが想像される。

けれども、支那の文句の表はし方は、反語に富むといはれてある。文句の裏が、表よりかも、大切な見所だといふのである。それといふのは、事實に於て、支那の文句は教へが主である。教へといふのは、諭へていへば、船の舵である。實際の船の方向とは舵の方向は反對に向く。社會の主義とか教理とかは、凡てが社會の舵で

ある。昭和の二字も亦、現代日本社會の上から見れば、その意味に於て適切な名に取れる。要は舵取る人の心と頭とに歸着する。

日本社會の現状は、見方に依れば確に一種の亂世である。大正十二年九月一日の大震は、中央集權の劃一的政治に破壊の手を加へた。さうして明かに政府の官僚が從來の中央集權政治の害毒を認めて來た。地方分權の擡頭は火を見るより炳な事柄である。

日本社會の裏面には、又その以前から分離作用が熾な勢で發生してゐた。分離作用は人間味の缺乏の結果である。臣が君から離れ、子が親から離れ、妻が夫から離れる如き、日本固有の道德を裏切る現象は、確に人間味の缺乏である。

何うして社會に人間味がかくも缺乏して來たかといふ理由は、形と物とを本位として、人間を取扱ふた、所謂從來の唯物本位の科學の力である。

他は措いて問はずとも、こゝに一つの例證として擧ぐべき點は、死體解剖の結果

より得たる智識を以て、活きた人間の生命を支配した事柄である。そのために、人間の生命は、何れ丈け失はれたか知れまい。或人は言ふ。獨逸があのやうに政府萬能主義を取つたのは、ビスマルクが科學知識の生理學にかぶれたゝめだ。そのために歐洲の大戦をも惹起したと。生理學から見た人間の頭の働は、唯外界の刺戟に對する、自己防衛の機能を司るまでに過ぎぬと唱へられる。

殊に隣人相憐むが如き至情に至つては人間の心の働に俟たねばならぬ理である。所が個人の場合に於て、心と頭との働の調和が、何といつても、非常な難事である。個人に於て、已に心と頭とは、互に相分離して、一致を缺く始末である。

この個人の狀態が、民族を本位としての、大なる有機體にも見出せやう。即ち社會はその有機體の心の位置にあつて、國家は頭の位置にある。

隨て若し改元の實を民族的有機體の上に望む場合は、その意味に於ける頭と心との調和一致が望まれねばならぬ。

民族將來の自衛の道は、一方に於て、個々が各自の頭と心との調和一致の工夫を講ずると共に、他の一方に於ては、民族全體としての、頭と心との調和一致が工夫されねばならぬ。

道理は以上の通りである。その道理に即して之が實行は、何うすれば果して得らるゝかといへば、それには一つの修養が要る。その修養の主眼とする所は、單に自己發見の一事である。

隨て若し日本が民族的有機體を本位として、自己發見の域に達し、國家と社會とを、新元號の理想に本づき、協同和合せしめ得ると假定するならば、その場合、その域に達し得る必要にして且つ絶對な條件は何かといふに、民族の中心を無の實在の眞に近づける一事である。具體的に之を直言すれば、國家主權の所有者を、物質的私有財産の羈絆から解放する一事である。

第二章 日本民族の社會

第一節 民族的生命の延長

日本を考察して、若し假に日本民族の死滅後に、その民族的生命の延長として、世界の人類社會に跨るべきものがあるとすれば、日本は、その民族の中心に、本能的な皇室愛を有つてゐたといふ一事に止まるであらう。

日本民族の社會的正義の觀念は、この皇室愛から發してをる。

世人は言ふ。若し英國が民族的に世界の表面から消え失せる場合には、英國民族の誇として、確にセーキスピアが残る。このセーキスピアは英民族の生命の延長といひ得る。

思ふに、英民族の社會的正義の觀念は、セーキスピアを中心として湧き出てをるといつて可い。

所が英民族の社會的正義の觀念の基礎的標準と、日本民族の社會的正義の觀念の基礎的標準とは、誰が考へても、決して一致すべき性質のものとは取れぬであらう。

英民族の標準は、社會的個が基礎である。それに反して日本民族のそれは、社會的全が基礎である。兩者の間に、個と全との判然たる相違が意識される。一口にいへば、英民族の正義の標準と、日本民族の正義の標準とは、全く正反對であるといひ得る。

人に依つては、この兩者の相違を目して、日本が社會的に幼稚な證據だと評してをる。

それでは日本が成長すれば、英民族のやうな社會的正義の標準を取るのであるかと問へば、さうだと答へる。

實際日本の現實の社會が證明するやうに、日本民族は己に個々に分離され行くで

はないか。喩へて言へば、山から掘り出した鑛石が、立派な塊であるやうに見えても、それに熱を加へて熔解すれば、鑛石は分子を本位に分離する。さうして、その分離の状態に於て、純不純を取捨按排して、初めて目的の金屬を得る。人間社會の組織的進化も亦同一視されねばならぬ。かういふことが説明される。

この説明を聞くときは、成程一理ある。日本民族も社會的に個々分離して、自己本位に一切を切盛りせうとする。この調子では英民族の跡を追ふに相違あるまい。併しながら、尙一步進んで考ふれば、英民族と日本民族とは、自然の立場を本位として、全然反對なアンチポードの位置を保つ。それかあらぬか、幾んど目に觸るるもの反對の形である。ナイフの使方、鉋や鋸の造方、禮儀作法の仕方、その他數へ來たれば限りないほど、彼我の間の事柄が反對である。

兩者の立場が自然に於て反對であることが、兩者の歴史若くは習慣を反對の型に造り上げて來たものではないであらうか。この點が疑ひの焦點である。

兎に角、煎じ詰めて考へて見れば、兩者は生の働を目的として、別段少しも異なる點はない。唯異なると取れるのは、その目的に達する形式的手段に過ぎぬ。

民族の歴史といひ、或は又習慣といふも、結局それは、生命の延長に資する手段の徑路に止まるのである。眞にその歴史や習慣やを曝露する日には、逆も目も鼻もあてられたものではないに相違ない。

民族の誇として、尊重すべき唯一のものは、生命の延長として、死後も世界人類社會に、永久に深き印象を與ふべき力である。

第二節 民族的生産

民族の生命の延長は、有形にしる、或は無形にしる、共に民族的生産として認められる。その生産は數に於て確に一個のやうに取れる。

之を英國の例でみれば、セーキスピア唯一つに限られてある。之を日本の例でみ

れば皇室唯一つに限られてあるとみることが出来はせぬか。セーキスピアと皇室とは、共に民族の生産として有形である。けれども、その内に潜む無形の生命はといへば、共に一貫した人類自然の愛の結晶たる正義觀念の泉である。

かう考ふれば、民族の生産は、社會構成の根本たる愛の至情の源泉を造り出すといふことが出来る。

英民族の歴史に依れば、セーキスピアの生れ出たのは、エリザベスの朝、即ち英國封建の瓦解後、百年足らずの間である。

當時の英國は、三等國位から歐洲の一等國位に進み、俄かの國費の膨脹で、國民に對する經濟的負擔は過重であつた。といふよりは、寧ろ國內は經濟的生活の脅威に依つて、人心に不安の念を満たしたのである。

併しながら、一方には歐洲大陸の新文學の影響と、自由思想の侵入とに依つて、英國社會の内容は、個々分離の状態であつた。その自然の結果として、人心は煩悶

焦慮、形に囚はれて自己を失ふ有様であつた。

以上の如き状態から、當時の英民族は、物質的と精神的との二面に於て、行詰りの境遇に陥つた。それが英民族のセーキスピアを産み出す當時の社會的陣痛と考へられる。

英國人民の歴史を讀んで、日本社會の明治の末から、大正の時代に於ける状態に彷彿たる部分を求むれば、確にセーキスピアを産んだ當時の陣痛期を見出す。

封建瓦解後百年の間に、英民族は民族的生産を造り出して、その生産物に依つて民族的生命の延長を行ふて來た。英民族の正義觀念の源泉は、即ちその民族的唯一の生産物である。

日本は已に封建瓦解後半世紀を経過してしまつた。さうして明治、大正の二代を過ぎて、昭和の代に歩を入れた。若し英民族の例に就いて日本を思へば、日本もそろそろ民族的生産物の出産期に近づいてよささうなものに取れる。

英國人の眼に映つた、明治天皇崩御の日本は、神から人へ移つたと取られてあつた。その意味は、日本内容の不安をいふのである。言ひ換ふれば、日本社會は、完全な統一から、不安な動搖へ轉化した意味である。

事實その意味の通りである。櫻島の爆發を初めとして、東京の大震災に至るまで日本は天災地殃に祟られてゐた。且つその上に、人心の惡化、思想の險惡、生活の脅威、人事の上の事柄は、寒心に堪へぬ状態である。

英國人の眼は道に高い。日本は神から人へ移つた。而かも日本のその人は、自己に一身の主を知らぬ人である。社會の不安動搖の起るのは當然過ぎるほど當然といはねばならぬ。

元來一身の主とは、具體的に何をいふのかといへば、自己の不變の本能的愛に過ぎぬ。その愛の力に依つてのみ、自己の一身の統一は行はれる。併しながら、その愛の力を働かすには必ず道を以てせなければならぬ。

例へば孔子の仁にしる、仁は普通の自然の力である。道の宜しきを得ざれば、仁は暴虎馮河に陥る。それ故に孟子はその仁をして社會に誤りなからしむるために、義を説いた。孟子の義は仁を行ふに誤りなからしむる道である。

隨て人間至情の愛の力は、それ自身絶對な神といひ得る。而してその愛の力を、人間の社會に適用するには、社會に適した道を探むる必要がある。その道が即ち正義である。正義の道は時代に依つて變る。

セーキスピアは英民族にその正義の道を與へた。その道は個人の道でなく、個人を取る社會の道である。その社會的正義の大道が、英民族がセーキスピアを通じて社會に造り出した民族的生産の偉業である。

日本は民族的にその社會的正義の大道を求め、さうしてその大道を何を通して造り出すかといへば、確に日本民族の中心を通じてあるに相違ない。

第三節 神國の表面

日本を神國と見て、世界に紹介を試みた小泉八雲は、日本を歐洲の先進國に比較して、社會的に二千年の相違があると言つてをる。

日本を研究した英人の評に依れば、日本社會の状態は、基督以前の猶太の社會状態を偲ばせるといつてをる。

神國といひ、或は又基督以前の猶太といふのは、一體何を本位にかく言はれるのであるかといふに、前者は社會に自由の缺けてをることをいひ、後者は一身に統一の主を知らぬ、二重人格の社會状態をいふのである。

顧みて、日本の社會の状態を直視すれば、實際自由はない。又その社會の人間は上下を通じて二重人格を以て満たされてをる。

何うして日本の社會状態は、かくの如く劣等かといへば、人間が内に強味を有た

ぬからである。弱い心の人間は何うしても、自由に活きる力もなければ、又二重人格を發揮せずに居ることの出来ぬ不安を有つ。

小泉八雲にいはすれば、自衛の武器を有たぬ無腰の百姓町人土方が、腰に秋水を横へた武士の前には、自然に保護色を發揮せざるを得なかつたのは無理はない。随て日本社會の封建時代には、武士の外、農工商の三階級は、心に自由の觀念もなければ、又自然に自己を見出す勇氣もなかつた。

その通りであつたに相違ない。さういふ社會の人間が急に明治維新後、社會の表面に現はれて來た。さうして以前の惰性を以て、物質界に横行し出した。社會に何の制裁もなく、國家に法網はあれども、その法を守るに意思のない人間の社會では嘘はつける丈けつかねば損、人は騙せる丈け騙さねば損といふ勢に馳せた。

それで日本の人間は、外國人の眼から見て、まるで詐偽としか取れなかつた。日本社會が表面に於て、基督以前の猶太の社會状態に彷彿と取られたのは、確に一面

の誤りない觀察である。

以前は日本の社會では、舌を二枚に使ふ農工商の三階級は、社會の表面には出さなかつた。表面に出る階級は、二言のない武士階級だけであつた。

維新後の日本社會は、文字通りに、百鬼横行の社會である。さうして同一の人間の顔が、對手次第で、佛面ともなれば、又鬼面ともなる。強いものには屈し、弱いものには壓しかゝる。それが普通の人間行爲と見做される。

假に男の集まる茶屋などに行けば、男は決して眞實を口から吐かぬものだと、茶屋の女等は信じてをる。嘘をいふのが當然で、嘘をいはぬは間違とされる。日本が基督以前の猶太であるとは、眞に適評である。

けれども、その適評の半面には、日本は亡國に近いといふ事柄も含まれてあるに違ない。幸にして日本に基督の再生を免かるれば、猶太の轍は踏まずしてすむであらう。

日本に對する外人の評は、神國の社會表面の觀察に本づくものと見て差支ない。兎角社會の放縱な表面は、軽いものが舞ひ揚つて目に付き易い。重いものは却て裏面に潜みがちだ。それ故、若し社會が表裏轉倒の機會を得るならば、重いものが目に附くやうになる道理である。

日本社會の人間として、日本の状態を直視する場合には、前にも述べたやうに、セーキスピアを産み出した英國社會を連想する。

當時の英國社會の内容は、猶太式に化せられてゐたのは明白である。セーキスピアのエヴニススの商人は、當時の英國社會内部の事情を示したものである。あのシャイロツクが代表である。

日本には現在、當の猶太人はゐなくとも、人肉を質に取る、猶太人以上の日本人が尠なくない。さうして、それらの人間は、公職を帯びて、市の議會の席にも列すれば、又公會の委員の椅子をも占める。標準は全く唯金一つにある。

日本の社會は金の社會である。生命さへも、金の前には光を失ふ。その金は何がかといへば、物である。

若し金が、國家の主權と社會の信用との結合した力のものならば、或は個人の生命に比較して、より以上の光あるかも測り難い。さういふ頭は現在日本の社會に於ける人間には持合せがない。彼等は猶太人同様に、物の世界に身の安全を託して來た人間である。社會に活きてても、冷たい刃と法との下に、自由も知らねば、人格も知らずに、縮みあがつて通して來た人間である。物の外に身を託する、何ものも理解し得ぬのは、理の當然といひ得る。

神國の社會の表面が、如何に穢く取れるかは、それを思へば想像以上である。人は全く物の奴隷である。人間自然の愛も涸れ、社會正義の道も絶え、僅に國家の法と劍との力に依つて保たれてをる。その不安は想像以上であるに相違ない。神國の前途は何う成り行くか、興亡二途の分れ目に近からう。

第四章 日本社會の弱味

個人でも、無形の精神の力を基礎に、自己を延長する働は強い。例へば女といへば弱いものだが、その女が子のために母の立場に立つ場合は驚くほど強い。自然の本能の愛の力で、自己の延長を行ふ働である。

所が日本社會の遺傳として、その自然の本能の力が弱められてをる。一口にいへば、出来る丈け自己を延長せぬやうに、早くいへば出しやばらぬやうに教へ込まれてある。

それで表面、日本社會の人間の表情は、自己欺瞞といふ一語につきる風がある。赤裸々とは口にするものの、その赤裸々が認められぬ。

例へば昔の習慣でいへば、武士は子供の死骸の前でも、表には笑を示すといった風があつた。今日例へば宴會の席などでも、自分のなじみといふお客の側は、藝妓

はなるべく避けて遠ざかる風がある。凡て自己欺瞞である。さうしてその自己欺瞞の動機はといへば、他人に眞を知られるのが厭だといふ一事にある。之が弱い。

日本社會の弱味の本は、眞を赤裸々に行ふ力の乏しい一事にある。

日本民族固有の弱點であるか何うかは別として、確に日本社會の遺傳に相違ない。何にしる日本社會の凡ての習慣には、儒教と佛教とが影響してをる。けれどもその二つにした所が、眞は隠されて、嘘が教へられてをる。皆治者階級の御都合主義の道具に使はれたからだ。

日本社會の弱味の本たる自己欺瞞は、確に一種の奴隸根性である。自己の自由を他に支配される結果が即ちそれであるからだ。

その奴隸根性が何所まで根を張つてをるか例として、日本の産業方面の一例を舉げてみれば、それは生絲である。

日本は製絲國として世界一として誇る。その世界一の製絲國の日本社會では、本

絲と稱へる生絲は皆外國へ出して金にする。さうして自國で使ふ生絲はといへば、凡て屑繭から製した所謂國用絲である。

この例は今日の事柄であるが、昔は東北の米澤藩の絹織物も、藩内では使はせず、外へ出して金にしたものだといふ。貧乏のためでもあらうが、何う見ても奴隸根性たるを失はぬ。

英國民は自由を生命とする。彼等の最も忌むものは奴隸である。隨て自己欺瞞はない。若し英國社會で、嘘付き、即ちライアといはれたならば、結果は決して穩には納まらぬ。決闘までも行き兼ねぬ。

さういふ英國では、例へば瓦斯機械製造工場があるとすれば、その工場の中は、凡ての設備が自製のガスエンジンを使用してをる。さうしてそれで買手に證明してをる。立派な自己延長の働である。

英國社會一般の産業が、自國消費を中心として發達させて、さうしてそれを他へ

延長して行く遣方である。

この遣方は、英國民の植民政策にも行はれてをれば、又一家經濟上にも現はれてをる。植民政策は英民族の血の延長である。その政策の根本には、英民族の血の純潔を保つ一事が、最も重要視されてゐた。土人その他異種族との混血を避くる方針である。

一家の經濟上では何うかといへば、客に備へる御馳走は、他から取り寄せずに、内で料理した品物に限る。さうして、之はホーム・メーキでござるといつて出す。國産奨励の根本精神といひ得る。自己延長の精神の産である。

最近日本社會では、盛に國産消費奨励を行ふてをる。併し誰でも人間は、安くて良い品物を買ひたがる。日本には安くて良い品物を賣る習慣がない。これは私の内で造つた食物だが、食べて御覽なさい、おいしいよ主義が日本の社會にはない。その反對に、まずいけれどもお一つ主義がある。謙讓の徳のつもりでも、奴隸から來

た謙讓は腐つてをる。自己延長は、謙讓の物差には合はずとも、確にそれには生氣がある。

かう考ふれば日本の移民政策といひ、滿鮮經營といひ、悉くますからうが一つ主義の適例である。それには、物にかじり付き主義が行はれて、力ある生命の自己延長の働がない。その根本は、日本社會そのもの、中に、自己欺瞞の弱味があるからである。

第五節 日本社會の神社佛閣

日本の社會で、一番、内に何者があるかを疑はせるものは、神社佛閣であらう。何が内にあるか分らぬ。けれども皆その前に行けば拜む。さうして多くの人は賽錢を投げ、何か祈をかける。

言ふまでもなく、誰れでも、内には何があるのか分らずに、さうして信仰の心を

捧げるのは、心に神佛を抱くからに相違ない。それでは、その神佛を、心の内に信仰してゐて、拜んでをればすみさうなものであるが、それでは氣がすまぬ。矢張、立派な建築の神社佛閣にお詣りする。

この日本社會の習慣を見れば、確に形式的自己表現の精神發露と取れる。表面本位で内面は何うでも主義の行方である。

日本一般、實質主義、實力主義とは口にはいへど、まだく形式主義、情實主義の勝つてをる所を見れば、神社佛閣そのまゝの日本に取れる。人も我も、形式的自己表現の物質に囚はれて、生命の自己延長などいふ精神の發露は、まだく影も現はれてをらぬ。

その影響の及ぶ所は何うかといへば、例へば地方で講演會でも催される場合、肩書ある人間か、或は高位高官の人間であれば、群衆席にあふるゝやうな盛會を極むるのであるが、無名の士では、席は空の場合が多い。それといふのは、講演の内容

も講師の蘊蓄も、そんなことにはお構ひなしに、唯立派な肩書官位に支配されて行く丈けである。かゝる聴衆は確に一種の迷信者の類である。

思ふに、日本の神社佛閣は、人間の強味本位のものではなくて、確に弱味本位のものである。さうしてそれらの神社佛閣は、場所を必ず山の手、若くは丘の上を選ぶ。神聖且つ清浄な地といふ意味もあるであらう。併し又一方から見れば、近頃社會に多い婦人科若くは花柳病の醫院式に、人目を避ける裏通といつた形に取れぬといひ得ぬ。

神社佛閣にお詣りする人間は、弱味を持つものが多数である。人目を避ける人間の類でないとは斷言出来ぬ。

日本の神社佛閣は、集合主義でなく、寧ろ個人主義である。一堂内に多衆の人間が寄集つて、互に顔を見知り合ふといふ行方でなくて、個々御都合主義で、成るべくは人目を避けてお詣りする行方である。恐らく、かゝるお詣りには、心に神佛宿

るといへども、その神佛には、慾か罪か何かの皮が被つてゐやう。赤裸々な眞の神佛は宿つてをる氣遣はない。所謂淫神邪神の類である。

假に西洋の基督教式の進んだ寺を見る。その寺は、場所は人家の群に交つて、その形式は一種の社交倶楽部の觀がある。その内に何があるかを見れば、基督教といふ立場から、十字架位はありさうなものに、十字架もない。神とか宗教とかいふ面の形象物は何もなく、唯一つ教壇がある。その教壇には誰が立つて説教するかといへば、坊さんでも宣教師でもなく、普通の人間が立つて説教する。神や佛の教を説くのでなく、自己の所信、心の眞を吐くのである。

或人はかういふ。一體寺は人間に互に顔を見知らせる場所だ。社會の制裁は、顔を互に見知るといふ一事に依つてのみ期待される。法だの教だのいふやうなものは、人間社會の制裁力は出来ぬ。

成程泥棒を働いた人間は、山手の神殿や丘の上の佛堂に逃げ込んだり、或は顔を

見知られぬ遠い地方へ高飛びする。神佛は問題でなくて、自分を知る人の社會が問題である。

第六節 日本社會の學者

目に觸れる日本社會の學者を見れば、日本の神社佛閣と同一型であることを直覺する。流行が本位で、流行外れした學者は、參詣人のない神社佛閣同様に、門戸が如何にも悲哀を訴へる。それに反して流行に當つた學者は、堂々たる門戸を張つて、參詣者も多ければ實入りも多い。けれども、實際内に何かがあるのかは、矢張日本の神社佛閣同様に、大なる衆人の疑ひの種子だ。

昔佛敎傳來の際、佛像を浪花の堀江に投げ込んで捨てたといふ話がある。恐らく學者間の爭論の枝葉に花が咲いて、時代の權勢爭奪の分野の問題化した結果であつたのであらう。

所が、その佛像が今日では何うかといへば、信州の善光寺様の御本尊と化してをる。争はれぬ。學者間の爭論の結果が、時代の權勢の道具化して、一時取つた捨てたといつても、後では何うなり行くものやら、何人も豫言出來ぬ。

基督は、あのやうに十字架で、極刑に處せられた。自身人間の社會に生れてゐながら、天國の帝王を以て任じてゐたのだ。現世と天國との理解のない人間に誤解されて、あのやうな始末を遂げた。

けれども、若しあの運命に陥らずに、あのまゝ基督が生き永らへたならば、一個の田舎の好々爺として一生を終り、後世の學者の争の種子にもらなすにすんだのであらう。

釋迦も學者に争の種子を蒔き、基督も亦同様に種子を蒔いた。學者といふものはまるで鳥のやうである。人の蒔いた種子をほじくる仕事しか知らぬ。

所が又日本の學者はその上手で、そのほじくる學者の跡を追ふて、所謂受賣仕事

しか知らぬ。佛教に對しても、或は又基督教に對しても、先人の粕を嘗むる外、何一つ社會に貢献した例があるか。日本社會にはまだその實跡が認められまい。

學者の見る所は、黑白左右、何れにか偏する。靈肉、神佛、勞資といった風に、必ず事物を差別對象させねば納まらぬ。それが學者の能である。

學問は古來、自然の眞は對手にしなかつた。必ず形式だ。それは必ず假定の上に立脚するからである。だから學者は古來死物に等しい。

學者は形に活きる。無形のものまで、有形化して議論の種子にし、商品化してしまふ。そこに學者が無から有を生じて、流行に當たりさへすれば、一時に堂々たる門戸を張り得る所以がある。

學者が先人の種子をほじくつて、さうして自分の藥籠中の物とするのは、恰度神主や坊主が、紙片のお札で、愚衆の膏血を搾取した型だ。

今日の所謂經濟學者なるものは、銀行紙幣といふものを是認して、さうして社會

民衆の膏血に換へさせてをる。まるで神主や坊主の跡を追ふ遺方である。

兎に角學者は賢い。賢いものには、愚なものは餌になるのが古來の通則である。賢愚は必ずしも正邪の標準ではない。

最近では社會主義の學者が現はれて來た。さうして左傾右傾、白化赤化の聲が戦はされる。極端に左傾し、或は赤化した結果、法網の悞が身に迫まれば、姿を暗まして逐電する。商人根性丸出しである。

今日の社會主義は、確に新たな時代に適合せんとする、釋迦の極樂主義、或は基督の天國主義と同一である。一口にいへば、時代の權力と相容れぬ、新たな世界の建設を理想として起つてをる。

凡ての新たな世界の建設は、堅固な意思の基礎工事が大切である。若し秀でた頭角の人間があらば、その頭角は、上へ向けずに下へ向けて、地盤に強く打ち込まれることが、何より一番大切だ。それを誰が打ち込んで呉れるといへば、それは必ず

對手とする敵である。だから敵に姿を暗ましては役に立たぬ。

日本の學者は卑怯だ。商人根性であるために卑怯といふ譯ではなくて、自身が物的資本の類であるからである。物的資本は臆病である。それと日本の學者は一致する。

彼等が行爲の卑怯な證據は、形式的自己表現に囚はれて、生命の自己延長に生きる道を知らぬ。

彼等は空間と形式とを自己の世界と心得てをる。彼等は時の世界に生きる意識を有たぬのである。隨て無形のものをも有形視して、さうして對象的に議論の種子を造る。

時に活きるの意識なくして、單に空間と形式とに限らるれば、即ちそれは消滅である。時に活きる考なくして、形式本位に事物の對象を論ずれば、親と子とが第一に差別の對象化する。

けれども事實、親子は一面に於て差別的對象の不可能な本性を有つ。時を標準として考ふれば明かにさうである。自分は先頃まで子であつた。今は親だ。親子は自分一體に存してをる。對象化するの空である。時の觀念を無視し、單に形式に囚はれて、活きた人間社會の事物を取扱ふ學者の弊は、社會を徒らに分裂複雑に陥らすばかりである。彼等には統一の意力が乏しい。それが彼等の卑怯なためである。學者は凡て分化の先驅者たるかの誇に燃ゆる。學者自身専門に分れる所などさうである。その實は、薬や齒磨粉同様に、同じ品物に變つた商標の容器を使ふ類である。

第七節 日本社會の自分

或時東北の一隅で、身を賣られてをる女に出遇ふた。その女は年頃二十四五であつた。話の中に彼女はかういつた。私は後のことも先のことも考へずに、たゞ現在

のことだけ考へて行きさへすれば、それで自分の一身は可いと思ふてをります。

それを聞かされて何う思ふたかといへば、ハ、アこの女は後先に非常な苦悶を抱いてをるのだと思ふた。女は後先に苦悶ある故、その苦悶を遁れるために、現在に逃げて来た譯である。大方、社會の弱い人間は、この女の通りに相違ない。自身身の安全は、現在のことだけ考へて行きさへすれば、それで自分はよい考に陥つてしまう。

それについて、思はせられたのは、釋迦の教だ。一生は一呼吸の刹那だといふ。あの教である。女はその教に辿りついてをる。大方釋迦も後先に非常な苦悶を抱いて來、どうく現在の一呼吸の刹那に自分を逐ひ詰めて來たのであらう。もうその次は死である。死地に陥れば人間は強い。かう考へて來て、再び前の女を眺めて見れば、何だか自分ははづかしいやうであつた。

何處で生れ落ちたか知れぬ女の一人身で、旅から旅へ身を賣られて、さうして現

在に一身を託して、心に少なくも「可い」と断定し切つてをるのは、一念の結果だ。窮達神に通ずる人間本能の自愛の力の結果である。

さう思ふて、自分の一身に考へ及べば、嘗て自分が賣られた女の一身を、自分の妻と定めた際に、周圍は幾んど反對して、母は自分を捨兒の成上りと宣告した。

捨兒と宣告された私は考へさせられた。人間は何うして生れて來たのか知らぬ。それで誰しも自分の親を知る人間は一人もこの世の中にないのが當然である。若し神が人間を生んだと假定すれば、その神も亦親知らずの捨兒であつたに定まつてをる。ア、自分は矢張神だ。さうして、この現在の自分が、過去の無限の生命の一切を抱擁すると同時に、又將來の無限の生命をも抱擁してをる。尊い哉、この捨兒の自分の身よ。かう思ふて、一時の悲痛の熱涙が、歡喜のそれに變つたことを追想した。

身を賣られて、後先に心を煩まされる女、御身の所謂現在とは、過去と未來とを

差別對象としての現在である。時にはそんな差別對象の出來得べき性質はない。光陰とか時間とかいふ言葉はあるが、あれは物の移動の形式の變化に過ぎぬ。その形式の變化を支配するのは時である。時は不變な絶對無限の世界である。だから過去も未來もないのが當然で、たゞ一呼吸の現在が、その絶對無限の世界である。

それ故に、自分一身は、時の世界を本位とすれば、この五尺の一個の體が、無限の宇宙であるのである。さう考ふれば、何の苦悶も、人生の後先に附纏ひ得る筈はあるまい。

けれども、その無限の宇宙を支配する一身の主を、自分自身に認めねば、その宇宙は空である。

極樂を發見した釋迦は、その極樂の實在を、自分自身の心の内と言つたといふ。又天國を發見した基督は、その天國の實在を同じく自分自身の心の中と言つたといはれる。それで自分を知らねば、極樂も天國も見出せさうな道理はない。

所がその自分なるものは、物質や形式では決してない。そしてその自分は空間本位には見出せぬ。必ず時を本位として、時の世界に於てのみ見出せるのである。

日本社會を見渡して見れば、あの身を賣られた女の境涯に在るものばかりと言つて可い。自分を思ふ。そして現在に囚はれて、自分一身のことだけを思へば、それで可いと思ふ。さうして得たりと考へ込んでをる。物と形の世界に棲むものゝ必ず陥る自然の成行である。

けれども現在、現實の事相として、凡ての人が時の世界に棲んで生きて行く。時なしに何うして生命の維持が保たれやう。個人の自分も、亦民族としての自分も、或は社會的自分としても、國民としての自分としても、時を意識して初めて存在があるのである。

新たなる日本社會の自分々は、過去に囚はれず、無限の時の世界に生きて、一身を宇宙視する新たな觀念を抱くことが切要である。そこに自己を發見する世界が

見出せる。

第八節 日本社會の民衆

政治的に立憲の日本社會は、如何ほど政黨の數が出来ても、それらの政黨が政權に對する優位の位置を占むるためには、厭でも應でも民衆の力を借らねばならぬ。普通の場合、その力を利用するのは、所謂利を喰はせて煽動するのだ。

そこで社會に一つの問題が起らざるを得ぬ。政治家は何も自分の懐に民衆に喰はせるやうな利は有たぬ。その利は何所にあるのかといへば社會にこそあるのである。それで民衆的政治の起る社會では、社會の懐は政治家のために濫用されて民衆煽動の燃料に使はれる譯である。

社會といへば廣い。その中の人數も多い。けれども、實際、政治に關與する政黨政派の人數は極めて少ない。又その政治家に煽動されて道具に使はれる民衆も、社

會全體の人數に比較すれば少數である。之を振子の時計に喩えてみれば、社會が時計全部とすれば、民衆はその振子の球に考へられやう。

何れにしても民衆は、政治家に利用される振子の役を務めることは確である。又その民衆が動かねば、政治的に社會の運用は止んでしまふ。

それで又社會に取つての一つの問題は、民衆の心理を調節する必要である。若し民衆が政治家の煽動に熱狂して、左傾右傾の振動を誤まるならば、社會の秩序は狂はざるを得ぬ。それ故に、民衆的政治の起る社會では、何うしても民衆の心理に一つの理想を與へることが肝要である。

今日の日本社會一般の民衆に、如何なる理想があるかといへば、恐らくそれは、賣られ／＼て世を渡る、かの女の理想であらう。後も先も考へずに、たゞ現在の自分一身を考へて行けば可いといふ、あの種類の理想に相違あるまいと思ふ。

一般日本社會の民衆は、一生に追はれて後先の自分の境遇に追ひ込められてをる。

その結果は後先を考へる暇なく、たゞ現在の自分ばかりが問題の焦點である。

この心理の状態は、如何なる性質のものかといへば、唯物に活きるといふ性質である。人間として消極的に小さくなつてしまつて、一本の藁しへにも身をまかせうといふ行方である。

釋迦の、一呼吸の刹那が人の壽命といふのは、時を本位としての悟道であらう。けれども、同じく現在といふ言葉でも、現在の物と時との本位の取り方で、心理の状態はまるきり違ふ。

あの賣られくへ行詰つた女の心理では、現在が物本位である。而かも自分一身の肉體である。之に反して釋迦の心理は現在の、一呼吸が時本位である。さうして自分一身は無限の生命である。隨て女の心理は時々刻々變化を免れず、釋迦の心理は無限に一定不變である。

日本現在の社會の民衆は、賣られくへ行詰つた女の心理に囚はるゝと見て、誤

りないと信せられる。左傾したかと思ふ間に、右傾してをる状態が、その心理の持主の常である。

かゝる心理の状態は豫測の出來ぬ不安がある。左傾すれば左傾で通し、右傾すれば右傾で通すといふならば、是非善惡邪正は問題でなく、豫測が出來て不安を除く道がある。今日の社會の民衆心理には、その豫測が不可能である。

それならば、物を與へて、その心を捉ふれば、それで安心出來さうである。所が物を與へる政治家間には、女を買ふ競争よりも、もつと烈しい競争がある。さうして、與へやうといふ品物は、社會の懷にあるのだから、問題は矢筈敷い。

そのため競争の熱は増し、煽動はいやが上にも勢を加へて行けば、政治家が先づ軌道を脱して、恰度女の競争に、女の身受け、果ては駈落、それ以上に進めば抱主の慘殺、妓樓の焼打、こんな狂態まで演ずると等しい狂態が、政治競争の上にも演じ出されまいものではない。

それでは、時計の振子に當るべき社會の民衆に、如何なる理想を吹き込むべきかといへば、時を本位とした性質の理想を吹き込むのである。例へば東京の風呂屋の主人は代々下から三助が上つて替つて行く。又芳原の樓主には、代々牛太郎が下から上つて替つて行く。その變化は時の支配である。さうして如何ほど主人が變つても、風呂屋も妓樓も變らずにある。之がその一例だ。

第九節 日本社會の因習的缺陷

日本社會の民衆は、社會的に幼稚だといふ。この世人の評は成程、確に尤も千萬と頷かれることがある。さらばその評は何うして頷かれるといへば、第一回國際労働會議の際、日本を産業的に特殊國扱ひした。その際日本は産業的にまだ幼稚だといつて諒解を求めたのである。

一體産業的に幼稚だといふことは、まだ社會の民衆が、專制的束縛の因習から脱せず自由を知らぬといふことに適當する。産業は自由國民の特殊産物であるからである。

事實に於て、日本は社會的に幼稚である。封建の殻を破つて出てから、まだやつと半世紀を少しばかり過ぎた所である。自由の何ものたるかは、文字や言葉で知る丈で、その本來の精神は何だか分らぬ。

少なくとも徳川治世三百年の間丈けでも、日本社會の民衆は、專制束縛の下に、身動きは出来なかつた。東洋流の、依らしむべし主義の下に、自由など樂にしたくもなかつたのである。

一體、何うして政治に專制なるものが行はれるかといふことが、一つの疑問とされねばならぬ。問題はこゝから解き始めてかゝる必要がある。

先づ、幼き子供の守りをすれば、この問題は直ぐ解けるものと考へるが早道である。子供は親の背に固く括り附けらるれば、安心してすやくと眠る。若し子供を

解いて布團の上にも寝かさうとすれば、目をさまして泣き出すのである。

子供から見れば、背に括られるのは束縛である。そして布團に寝かされるのは自由であるに相違ない。所が子供は、その束縛を受けて、安心して眠つて、自由に解放されて、目をさまして泣き出すのである。

以上の眞理を突止めて考ふれば、専制政治の道理が確に會得されねばならぬ。幼稚な社會の民衆は、束縛して括りつけ、安心させて眠らせて、成長するのを待つより外に道はないと考へられやう。

併し何時もさう括つてをれるものではない。それで時期が来れば自由を與へる。所が、その自由なるものが、甚だ性質の分り難い代物である。

英人は自由を生命なりと叫ぶ。何うして自由が生命であるのか。生命は尊い。自由はそれほど尊いものであるか。それが仲々分りかねる。

子供の例で考ふれば、子供は自由を與へられて泣く。それは自由に不安が伴ふか

らだ。自由の半面は不安である。それに何うして自由が生命であるほどに尊く取れるのであらうか。

子供ならばいざ知らず、青年以上は自由が生命でなければならぬ道理がある。青年は獨立を要する。その獨立には自由が絶對必要である。その理はかうだ。

自由は不安を伴ふと言つた。それは眞である。その不安に打ち勝つには、自分自身の努力を出す必要がある。子供の歩き初める時の有様を見ても分る。その不安に打勝つ努力が、人間を偉大にし、且つ社會に裨益を與へるのである。

それ故にかう考へられる。自由そのものは生命でも何でも無い。自由に伴ふ不安に打勝つ自己の努力が生命であるのである。

日本社會の民衆は、餘り長い年數の間、括りつけられて育つて來た關係から、専制束縛の政治に習慣附けられて、自由の何ものたるかを知らぬと同時に、折角自由を與へらるれば、不安を感じて泣き出すやうな始末である。まだ幼児だ。

日本で近來、社會上、民衆の叫びの盛んなのは、その泣聲と取ることが出来はせぬか。又民衆中の一部には、自由を求めて、自由を知らず、自由のために、内心苦悶を受けてをる滑稽もあるのであらう。

併し一時は、このため社會に多少の動搖は免れぬにしても、自由は活動的社會人類の生命たることは、英人の信する通りである。日本の民衆は、兎もすれば、その自由を偶像化して、拜めば樂に世の中が暮らして行けでもするかのやうに考へてをる。舊い時代の遺傳である。

日本が初めて憲法を發布した際、憲法が出れば、百姓も土方も町人も、華族にでもなれるやうに考へたといふ。今度の普選でも、場所に依つては、虎の子でも取れるやうな氣でをる所がないとはいひ得ぬ。憲法といひ、普選といひ、共に專制から自由への道の彘に過ぎぬのである。さうして、その彘の數を積む毎に、不安は一倍し來たることを忘れてはならぬ譯である。

第十節 日本社會組織の内容

一口に言へば、日本社會の内容は、締りのない不完全なものである。その根本理由は、社會的に個が全のために没却されてをるためだ。隨てその組織の構成から見て、内容の力が外壓に對して極めて薄弱である。

以上の證明は、日本旅館が一番明瞭にして呉れる。一體旅館といふものは、その性質が小さな社會である。その旅館は又、國々土地々々の習慣で、全社會の小さな雛型と見て差支ない。

物は比較。日本旅館の真相を知らうとすれば、比較のために、西洋風のホテルに泊つて見る。

西洋風のホテルでは、ホテルに入つて帳場で記名して、與へられる室に通れば、チャンと鍵のかゝる戸が附いて、内は自由の自分の天地だ。室の周圍を見廻せば、

窓と壁との外には何もなく、而かも壁は堅固に出来てをる。考へやうでは、こんな室に、こんな丈夫な壁を附けてと、不經濟に思はれやう。

この室は本當は泊り客の寢室である。ホテルでは寢室を貸す。それで食事や應接等は、その室以外とする。勿論、何所のホテルでも、食堂と應接間の設備のないホテルはない。

西洋風のホテルを、かうして一見すれば、内容の建築上の構造も堅牢に見えるが又そのホテルそのものゝ組織が、一家族の風をなして、一つに纏つてをることも分る。さうして、その一家の纏つた中で、各個の泊客は、戸締のキッチンとした、自由な室が慰安の自分の天地として與へられてあることが分る。

かういふ式の西洋風のホテルに泊つた経験を以て、日本旅館に泊つて見る。女中か番頭に案内されて、與へられる室に通る。室は隣と唐紙一重、廊下とは障子越、戸締はなく、まるで野原の開放と同一である。浴衣に襦袢の重着を、自分の旅着に

着更へながら、一浴して来て、長火鉢の側に坐る。茶を飲み、菓子を食ひ、お膳が出て、一杯傾けて、女中に戯談言つて、腕枕に横になる。實に氣樂だ。日本旅館のこの間の氣分は、到底西洋風のホテルには味へぬ。

その間に來訪者がある。この室に通ず。歸つてしまへば、直ぐに夜具が持ち込まれる。何のことはない。居間から食堂、食堂から應接間、應接間から寢室、一つの疊六枚の室が、かう早變りに役を勤める。如何にも便宜に經濟的に出来てをる。

けれども、寢ながらジツト、周圍や天井を見廻して見れば、如何にも構造上から見て弱い建物である。さうして隣から又その隣が、唐紙一重取外しさへすれば、筒抜けの長い廣間に變る譯だ。室と室との間には、實際構造上から見て何の力もない。一見、室はガラ明に併合されるが、さてその大廣間の構造の力といつたら、確に極めて薄弱なものだ。

殊に又、日本旅館の客室といふものを考ふれば、之は獨立した一個の家式に見倣

されて出来てをる。泊客は旅館について、一軒の住宅を借りる勘定である。それで客は食事も應接も睡眠も、皆この自分の室ですます。かう思へば面白い組織だ。

所が、よくよく考へて来れば、この組織の中では、小さな一家が、締りも守りも、獨立して持ち得ずに、旅館任せに、一切自分の生命財産の運命を放棄せねばならぬ仕懸になつてをる。障子越の廊下、唐紙一重の客間、夢路を辿る旅人の運命は、全く文字通りに、朝露より尙儂ない。

かうして、西洋風のホテル生活と、日本旅館の生活を比較して来てみれば、西洋風の社會組織の内容と、日本風の社會組織の内容とが、明瞭に目前に現はれて来る。さうして兩者の組織に含まれてをる人間の日常生活の不安が、何れ丈けの相違のものかと想像出来る。針

若し旅館に在つて、旅館の主人そのものが、旅客に對する誠意を缺き、或は雇人が不純であるか不正で、もある場合には、旅客の迷惑は言葉には言ひつくせぬ。さ

うして、その自然の成行は、旅館の破滅を來たすのである。その通りの事柄が、社會全體の上にも見出せやう。さうして、社會全體を綜括して、日本式の大旅館を経営してをる當事者はといへば、日本の國家そのもの、外にはあるまい。

第三章 日本民族の國家

第一節 民族的血の保全

日本民族が、民族的永遠の誇りとして保つ唯一のものは、民族的血の中心を、永遠に守り続けるといふ事柄である。この事は民族自然の本能的愛に即して、人間の意識を超越した事柄である。

孔子が唱道した教の仁は、日本民族のこの自然の本能的至情の普遍の働きに過ぎはすまい。仁は教へて教へられず、學んで學び得られぬ。至純な人間自然の奥に潜む、本能的愛の至情そのものの働が、即ち仁である。日本民族がその血の中心に對する自然の至情は民族的に仁である。

日本民族はこの血の中心を、有形的に永遠に保全し、繼續して行かうとする。この觀念は自然だ。教へても教へられねば又學んでも學べない。頭の力の作用でなく

て心の力の作用である。

日本の遠い過去を顧みれば、國內亂麻の状態の中に、この血の中心を保全する立場のものが、常に正義の立場にあつた。日本民族の社會的正義は、それに依つて表はされてあつたからである。

日本には古來、今日の意味の國家の組織は見出せぬ。今日の國家組織の根本意識は、人性の惡の半面を基礎としてをる。所が日本の如き民族の血の中心を保全する觀念から成る國柄では、人性の惡の半面に囚はれず、善惡を超越した親子の至情を以て建國の基礎と心得てをる。

今日の國家組織は、弱者の造つた組織である。日本民族の建國の基礎は、強者の造つた基礎である。弱者の意匠に本づく國家の基礎は、絶對な力を中心に求めて、その力の保護の下に、生命財産の運命を委託する。さうして、その絶對な力の中心を、神聖にして犯すべからざるものと心得させる。之が今日の國家組織の核心であ

る。

日本の國家的組織は極めて日が浅い。そしてそれは西洋の移入物である。その組織の製造元は獨逸だ。その獨逸國といふのは、建國極めて日淺くして、而して間もなく破壊して、目下共和國として新たな建國の基礎を築きかけてをる状態である。

獨逸の大戦以前の國家は、目的のために手段を選ばぬ主義であつた。それで國家の前には個人の自由は認められてをらぬ。恰度日本式の旅館の型である。

この型の國家組織は、征服者が、直接、被征服者を統御する手段である。絶対統一の行方が、この型の國家組織である。日本社會の旅館の型も、亦絶対統一を必要とした、被征服者に對する征服者の行方の一斑である。

日本は歴史の示すやうに、王政衰へて群雄割據、地方豪族の切取勝手の世と變り社會は鎌倉幕府以來七百年餘の間、征服者と被征服者との關係で成立つてゐた。到る所日本の内は、地方的に絶対統一の跡ばかりである。その影響が日本旅館にも現

はれてをれば、又戸毎に町家の構造にも残つてをる。

日本の家は絶対に自由がない。若し無理に日本の家で自由の場所を求むるならばそれは單に雪隠丈けである。他は凡て開放されて、言はず無抵抗主義を示して居る。

それ故に日本の幕府七百年間の社會の内容には、小國家が分立した。恰かも今日の世界的國家存立の觀を呈してゐた時代も少なくなかつた。

隨て明治維新に際會して、日本が獨逸式の國家組織を移入するにも、一面から觀察して、相互一致の點が見出せた譯である。

併しその觀察は明かに征服者側の觀察であつた。具體的に言へば、長閑若くは薩閩者流の觀察であつた。さうして、それは明白に、明治維新の大義を無視した觀察であつたことは争へぬ事實である。

維新の大義は四民平等王政復古の二事である。四民平等は征服被征服の關係とは

兩立せぬ。又王政復古の大義には、民族的血の中心の保全が絶対必要條件である。この民族的血の中心の保全を具體化するには、四民平等に依る民族自然の本能的愛の至情を自由に發揮さす外に道はない。

然るに今日の日本の實狀はといへば、虎門事件を長閑の餘流より起させ、赤子の至情は到る所官憲の壓迫の下に遮られてある。

今日の官憲とは征服者の立場の閥族者流の餘流である。その官憲は、恰かも獨逸に於ける普魯西の官憲同様の立場にあるのは明白である。

かゝる官憲の力を以て民族的血の中心の保全が可能視されやう道理はない。官憲は國權の維持が目的である。その官憲は帽子の徽章唯一つで普魯西式の官憲ともなれば、又共和式の官憲ともなる。國權には帝國共和國の差別はない。又官憲にも隨てその差別はない。何れも物にあり附いて活きんがための官憲に過ぎぬ。

民族的血の中心を有形的に保全する絶対な理想の持主は、かゝる官憲者流とは相

容れぬが當然である。試に楠氏の一族を顧みよ。七死七生、尙ほ王賊を平ぐる覺悟を以て刺違へてをる。

第二節 民族的至情の發揮

幕府を倒して、四民平等、王政復古の大義に向つて、日本民族の社會の血の躍つたのは、その根本原因は、民族的血の中心保全の外にはなかつた。

日本は武士道擁護の基礎として、血縁の雪辱は草を分け野に伏しても、敵を索めて復讐するのが、幕府時代の武士の信條であつた。そしてその信條は武士階級以外の凡ての階級にまで及んでゐた。恰度それは歐米の個人間の雪辱に、決闘を是認したのに似寄つてをる。歐米のは自己の範圍が一身に限られ、日本のはその自己が血を本位とした範圍であつた。

元來、人間自然の至情からいへば、血を本位としての自己觀念は、決して一身一

個の限られた範囲に止まるべき性質のものでないのは明かである。

一例を最も著しい事實に徴する。第一回の國際労働會議では、大戰後の熱のまだ熾んな際であり、民族自決の唱道もあつて、民族的色彩が濃厚であつたのは、當然の事柄であるべき筈であつた。

けれども會議そのもの、性質からいへば、政府を中心として、勞資の對決といつた調子なので、表面確に階級意識本位に取れる。勿論その裏面には國際意識は利害關係上濃厚に伏在してゐた。

併しながら、會議の席の空氣を見れば、階級意識を本位とした總會席上では、その空氣に緊張味が極めて乏しいのであつた。何れかといへば、委員會席上の空氣が遙に緊張味を示してゐた。空氣の緊張味は人間の眞劍味の反映たるは言ふまでもない。

所がこゝに非常なる緊張味を示してゐた場所が一つあつた。それは労働者側代表

丈けの秘密會議の席である。こゝでは何が本位にされてゐたのかといへば、それは民族的血であつた。アングロ・サクソン民族系統はアングロ・サクソンの血で結合され、又ラチン民族系統はその血で結合される姿であつた。その席上の種族間の議論の熱は、まるで常識外れて血眼の騒ぎであつた。

世界の表面が正にこの通りである。而かも平和會議の片割の労働會議が正にこの通りであつた。血の力は眞に強い。

日本國民が、民族的血の中心を戴いて、國家の基礎を築き上げつゝある事柄は、日本民族に取つて、最も深い意義を有つ。往々世人は世界無比の國體として誇の種子とする。無比か否かは問ふ所でない。それよりかも、寧ろ他に囚はれずに、民族自然の本能的愛の至情を、その民族的血の中心保全に、自由に發揮する道を求むることに努力せねばならぬ。若し日本國民が民族的血の中心を國家の主權として戴く上に、世界無比の誇を自由に味ふとするならば、その誇は、單に以上の道を求め得

る、民族的努力の外に何もものもありはせぬ。花に對する人の誇は、之を買つて持つ人のよりか、それを造るに努力を拂つた人のが遙に優つてゐやう。一輪の花でもさうである。民族の産として、造り上げる唯一の國家は無限に民族の誇りとして存在する。その國家は、民族自然の愛の至情の力の外に、造り出すべき道なき性質のものであることを知らねばならぬ。

普通世間に愛國といふ言葉がある。愛國は悪くはない。併し愛花者は必ずしも花の耕作に努力を拂ふものとはいひ得ぬ。世間普通の愛國者も亦切花の愛玩者の流義が多い。愛なくば花も出来ぬ。國家を造るに必要な愛の性質は、民族自然の本能的愛の努力に俟たねばならぬ。

第三節 維新の大義

倒幕を目標として起つた維新の大義は、日本民族の立場からいへば、決して一朝

一夕に出来たものではない。かの大義は、孔子の所謂仁の自然の働である。千古の日本民族祖先の血に宿る本能的愛の至情の發揮に過ぎぬ。唯その至情が、孟子の所謂義に依つて、親を滅して天地の大道に即したのである。

維新の標榜にかゝる四民平等、王政復古の意は、單なる形式の士農工商の差別排斥、四海統一して古の王政に復るが如きことと思ふは、淺薄の至りである。その意は深く、形式を超越した、自然の力に徹せねばならぬ。

幕府を倒して王政に復るのは、民族自然の血の中心の保全の道である。この道を求むるために、日本民族は自然の本能的愛の至情を發揮して、大義に本づいて親を滅し、倒幕の大舉に出た。本能的愛の至情を發揮するに、士農工商の階級差別が何所に成立ち得るであらうか。

王政復古は仁である。形の上の政治の道でなく、王政を實行する民族自然の至情の發揮の自由の道でなくてはならぬ。

日本民族の政は、内から發する愛の至情の發露である。決してそれは征服者の手から發する冷たい法や劍の力の表現ではない。

不幸にして一時民族的中心の王政衰へ、地方豪族の蜂起に依つて、日本の國土に征服者の政治が行はれた。そしてそれが七百年の長い間に、日本社會に新しい形式習慣を造り出した。殊に徳川幕府三百年の間が最も盛であつたのは言ふまでもない。

日本民族の至情の發揮の自由の杜絶は言ふまでもなく、日常生活の個人の自由まで束縛されてしまつた。

明治維新はその失はれたる自由の回復であつた。物や形を目的とした維新でなく、無形の民族自然の至情の自由の回復が目的であつた。

所がその間、幕府に類する薩長の閥族が現はれて、漁夫の利そのまゝの功を占めた。維新の大義を滅却して、新に日本に邪道を導いたのである。

何故に西郷南洲が西南に雌伏して、時の到るを待つたかを思へ。時利ならずして

敗れたる西南戦争は、官場の罪を鳴らして、天下に維新の大義を公知せしむる目的であつたのではないか。

今日日本社會の不安といひ、又は官場の綱紀紊亂といひ、その事實を蔽はんとして蔽ふことの出來ぬ事柄であらう。その事實の根本原因はそもく何れより來たるかといへば、明治維新の大義滅却に起因して居るのであらう。

社會は不安のたび毎に、外界の公敵に襲はれて、却て自救の道を見出した形であつた。日清戦争といひ、又日露戦争といひ、十年毎に一回の外戦に出遇つた譯である。

歐洲大戰に引込まれて、青島に出兵したのも亦十年目に偶發した。併しながら、その後の日本國內の状態は、外戦でさへ緊張を缺く有様であつた。シベリヤ出兵の後を見ても、國民は耳を蔽ふほどの醜惡な聲を聞かされた。

殊に昨年の官場から漏るゝ醜惡な響は、顔を蔽ふも、まだ足らぬほどの、國民的

恥辱である。

日本民族は、かゝる官場の下に、一日も枕を高くして眠ることは出来ぬ。民族個個の不安のためでなく、民族的血の中心の不安のためである。

顧みれば、幾多の志士仁人が、親を滅して大義を守り、さうして成し遂げたる維新の大業を、今や空しく葬り去られんとする不安がある。

日本民族の立場から見ても、維新の大義を再び守り、民族自然の愛の至情を自由に發揮する道に向つて進まねばならぬ必要を切實に感受する。

第四節 官憲の邪道

事實に於て日本の官権は、普魯西式の模倣である。普魯西は國家の理想をマキアヴェリ式に取つた。その主義は絶対統一である。さうしてその手段は、目的のために、手段は選ばぬ行方である。

主義は、國家の立場として、勿論、絶対統一にあるべきは是認出来る。けれども、目的のために手段を選ばぬ行方は、國家を詐偽の機械に使ふ行方である。

實際の所、國家といふ機關は、その國家を創意したマキアヴェリの考では、國民個々に代つて、周圍の變化に適應してやる性質のものであつた。

してみれば、國家の役目は、周圍の變化に、適應すべく、絶えず保護色を發揮する機能の持主と取れる道理である。保護色發揮は取り方一つで詐偽である。

現實の事柄に徴して、日本官憲の行爲を見るに、マキアヴェリ式そつくりの所が見える。國民に對しては、國法を以て嚴禁して置く事柄を、必要の前といふ理由の下に、平氣でそれを犯して行く。さういふ事實は、縱令秘密に行はれても、國民の眼に觸れる。

そのマキアヴェリ式の行方は、恰度日本の家庭に於ける親式の行方である。

日本の家庭の親といふのは、普通專制的に出來、さうして絶対統一を旨とする。

大抵、懐合の都合のよい殊に新たな成金風を咲かせる家庭では、主人公大に秘密に發展する。

主人が發展すれば、主婦も負けず劣らずに發展する。けれども共に、噓えていへばメーソンの會員式に、絶對秘密に行動を口にせぬ。

所がその家庭の子供は、何と口にいふかといへば、日本の親ほど噓つきはない。自分の可愛いといふ子供に對して事を秘密にするばかりか、子供にはしてはならぬといふことを、親は平氣でして見せたり、又は子供の前ではせぬやうな風を見せる。日本の親は全く噓つきだ。かう家庭の子供は親を見てをる。不良兒ならざるを得ないであらう。

親は子供を何うしてをるかといへば、幼稚園に金を出して頼んだり、そこがすめば小學校へ出す。子供はそれで先生の力で良くして貰へると思ふてをる。學校教育萬能の日本である。

所が日本の學校教育は觀察力増進専門の教育である。さうして批判力を養はせる。その力を以て、子供は自分の親を觀察批判するのだ。

その一家の事柄が、恰度日本の國家の事柄をつくりである。國民の中に不良國民を何の手で防ぎ得るであらうか。汝に出でたるものは汝に歸る。その諺は國家の官場にも除外されはせぬ。

凡て國家の官憲は、恰度國家が保護色發揮の機能の持主であるやうに、各自保護色發揮に妙を得てをる。噓を吐くことの妙は、國家の官憲に勝てるものはない。昔から眞らしく噓のつけぬ人間は官場では出世は出来ぬとされてゐる。

勿論、國家の理想の半面は、何といつても周圍の變化に適應する神變鬼化の妙力がなくてはならぬ。隨て國家を代表して、その國運を一身に負ふ場合には、その神變鬼化の妙力發揮は、大切な事柄に相違ない場合があらう。

けれどもその妙力を、國家の政道に立つ少數の官權者が、國民多數に向つて發揮

するに至つては、邪道の極と言はねばならぬ。日本が模倣した普魯西式の官憲は、正にその邪道である。

今日の普魯西の運命は、その邪道の導ける自然の歸結であつたことを知らねばならぬ。日本社會の内容の不安は、この邪道に負ふものが多いのである。

己にその邪道に陥つて、言はず盗泉の水を口にせる日本現在の官場に棲息する人間は、日本民族の血の中心を保護する資格のあるものではない。日本民族の維新の大義を顧みれば、先づ官場の倒壊が一番の急務であらう。

日本官憲の邪道はその官場から發してをる。ウツクシクモ一ゼノクオトク。

さらばその官場とは何を指すかといへば、それは目の及ばぬ廣い範圍である。一口にいへば専制の力の働く所悉く官場である。

邪道の撤廢、官場の倒壊は、専制破壊をいふのである。その専制は、一國といふ立場の外、一家の立場、一身の立場にも、巢を喰ふてをる。日本社會の人間は、悉

く官憲の邪道に祟られて、その血の中には専制の毒が潜んでをる。

◎第五節 日本官憲の自覺

日本で最近著しい一つの事柄で、日本官憲の自覺の一面を物語るものがある。それは公娼廢止である。

何故に公娼廢止、即ち遊廓撤廢が、日本官憲の自覺の一面に値するかといふに、公娼は國家の官憲そつくりに取りれるからである。若し日本の官憲に、形に囚はれず深い内省の力があるならば、公娼廢止に先つて、官僚廢止を主張するであらうと思ふ。

日本の公娼は樓主大事に客を騙して勤めするのが本務である。人道から見て、最近官憲が眼を光らし出したのも、その邊の點からであらう。遊廓といふ所は、マキアヴェリ式に出來て、目的のために手段を選ばぬ主義の場所である。

官憲のこの自覺は、確に一進歩である。さうしてその進歩を促した動機は何かといへば、普魯西の官憲の没落であつたに相違ない。

日本官憲は、國家を本位として、英國に秋波を送り初めた。さうして英國が私娼本位であるために、公娼廢止の舉も日本に起つたものかとも取れる。

公娼を廢して後、日本は何う跡始末をするか、今日の疑問のやうである。聞く所に依れば普魯西式に依るといふ。一種の皮肉である。

公娼は喩えていふまでもなく、實際の所、大道の共同便所に當る。よくそれは世人の言ふことだ。日本には不潔な醜惡な共同便所が多い。でも之がない場合は、旅人の迷惑は察しやられる。

日本から以前北米合衆國に行く場合には、便所のことを教はつて行かねば、困ることが多かつた。日本式の共同便所は、米國の大道にはなかつたからであつた。

近頃日本でも丸ビルその他の建物に立派な便所が數多くある。それで大道の共同

便所など用はない。それを日本で心得てをる人間は、米國へ行つても困りはせぬ。丸ビル式の家に限らぬ。政府の建物などにも用達しに入れる。

此頃の日本の社會局などの調査では、日本の女が次第に公娼化する數を減じて、職業婦人化する數が増して來たといふ。面白い現象である。

合衆國の例でいへば、以前は合衆國にも公然の秘密の公娼があつた。それが禁じられて、所謂娼婦解放となつてからに、恰度昔の奴隸解放の際のやうに、解放された女が安全地帯へ集まつて行つた。昔の奴隸は華府に俄に集まつたといふことである。今度の娼婦も解放されて、華府に集まつたものが少なくなかつたといふ。華府の政府建物内には、私娼が何れ丈け巢を喰つてをるか知れぬといふことである。

日本と合衆國とは國情が違ふ。併しながら、それは無形の事柄の相違に止まつて有形の事柄は、東京を見れば分るやうに、合衆國式に變化して行つてをる。

公娼廢止の跡始末は、普魯西式にと世評はあるが、こればかりは、官憲の力もさ

う豫測は出来ぬであらう。兎もすれば解放された公娼が官省の内に巢を喰ふやうにならぬとも保障されまい。

官憲の形に囚はれた自覺の核心は、専制より自由への標榜に歸着する。その専制といひ又は自由といふも、一種の形式的な思想である。その内容の眞に觸れた無形の働を本位とした専制でも自由でもない。

日本のやうな社會的に幼稚な民衆の國柄で、便所に等しい娼婦問題を、さう形式的に取扱へるものか何うかは大なる注意を要する點だと思ふ。それよりは官憲の自覺として、如何に民族の血を保全し得べきかを考慮する必要があると思ふ。

民族の血は腐敗してをる。殊に歐洲大戰の影響を受け、經濟的津浪のために、甚だしく日本民族の血は荒らされた。日本の娼婦で、花柳病の有毒者でないものは、一人もないといつて可いといふことは、その道の報道である。そんな有毒者を何うして公に許して置くのかと訊ぬれば、抱主が立ち行かぬといふ話である。

この娼婦の花柳病問題も、日本官憲にはよく適合する問題でありはせぬかと思はれる。松島事件とかいふ問題にからんだ事柄は、官憲の有毒を物語るものゝやうである。日本民族の血を腐敗さす有形的な病毒以外、民族の血の中心を損ふ無形的な病毒がありはせぬか。之が日本官憲の最も重大な自覺を要する點であらう。

第六節 國家の鞍替

時代順應、是々非々、刻一刻に變化して、周圍の事情に適合して行く近代國家の精神は、一面から見て、民衆の心を釣る活動劇に、芝居の役者が鞍替する精神の觀がある。

凡てが民衆本位、社會本位へ向き替つて行く。以前は國家が國家生活本位一天張り、社會を無視して進んで行つた。即ち絶対統一主義の實行である。それが俄に變化して、國家が社會生活本位に生きて行かうとするのである。勢そこに、國家の

立場から考ふれば、矛盾した二途のあるのは争はれぬ。

例へば日本の官憲が獨逸の運命を目撃した結果、日本を國家的に、英國へ鞍替させやうと努めてをる。一見芝居の活動化である。この行方は專制本位の國家から自由本位の國家への行方である。政府萬能主義から個人萬能主義への轉換である。國家を守る上の一策として考へられたものであらう。けれども、日本が模倣した獨逸式の憲法と矛盾の生ずる悞はないか、日本は民族の立場から之を思ふ要がある。

又他の例を國內の産業方面に取つて見る。官憲は頻りに社會に對して産業組合制度を獎勵してをる。確に之は民衆本位の組織である。さうしてそれは社會生活本位の行方である。

この新たな産業組合制度は、個人本位の株式會社組織とは、矛盾した徑路である。一國內の産業組織にこの矛盾した二途を見出す。

勿論人間の頭と心とが、一個の身體の中には、頭から來る神經作用と、内心から

來る機能的作用とが、同時に兩立し得る自然の事實に理解を有つなら差支はない。

けれども現在日本社會の實狀から見れば、隣人でも敵と見る有様である。一つの組織に、矛盾した二つの途を、衝突なしに歩けるといふは至難であらう。

兎に角日本の官憲は、國家の方針を、國家生活本位から、社會生活本位へ向替へてをるのは事實である。この事實の内面には、背に腹は替へられぬといふ、窮極の事情が伏在してをるに相違ない。

この窮極の事情が、何うして日本の國家の上に生せねばならぬのかといへば、それは國家の陥つた邪道のためだといひ得る。

虚偽を手段に、物を目的に、抱主本位に勤めて來た習慣の遊廓の娼妓は、時代順應のため料理屋の酌婦に鞍替する。專制から自由への轉換である。家の妻は夫を棄て、ビルディングの職業婦人化する。娼妓の行方と同一方向である。征服者氣分、專制氣分、所謂普魯西式の官憲氣分の支配する場所には、この類の分解作用が發生せ

すには止まぬのである。

日本國家の官憲が、獨逸式の憲法をそのまゝに、英國に鞍替したり、株式組織をそのまゝに、産業組織を奨励したり、矛盾の二途に脚を踏み込むのは、日本國家の立場から見ても、確に自己破壊の極に達した觀がある。一種の狂的狀態といひ得る。専制から自由へ、束縛から解放へ、その名は極めて美しい。けれども日本が、専制束縛の下に、眠つて夢みて暮らして來た、過去數百年の惰性は、一朝一夕には取除けぬ。

幼いもの弱いものゝ常として、束縛の下に安眠が出来る。自由解放は不安恐怖の本である。今日の日本社會の人間に、果して自由に伴ふ不安に打勝ち、或は解放に伴ふ恐怖にびくともせず、進み得るもの何れ丈けあらうか。

事實に於て、料理屋の酌婦なるものは、自由の化粧した公娼である。又ビルヂングの職業婦人は、手や頭の働で口は糊せても、體が飾れぬ。職業婦人は何うして體

に蠶の絲が纏へるかといへば、それは自然の與へた武器の働である。

かくして日本は邪道の導ける自然の結果、恐るべき病菌のため、内から破壊し行くのである。國家が取つた普魯西式の官憲の祟も、その一つの原因であるが、それ以上、日本には幕府時代の征服的統一制度の祟がある。維新後、薩長はその二つの祟を合せて、新たな勢を増長させたのである。

明治大正の日本は、優勢であり、且つ全盛であつたと云ひ得やう。けれどもその優勢と全勢とは、恰度帝都の震災當時の大工左官労働者が、見掛けは花々しく働いて、懐が太つたやうで、結果は何うかと後になれば、懐は空、身には病毒、さういつた調子と同様な性質のものに取れる。

日本國家は、その内部にかくの如き病毒を潜めてゐて、何う騒いで鞍替してみても、内部の病毒は除き得られぬ。名醫ありとも如何とも施す術はありはずまい。

さらば日本國家は、この際何う自己を處置するかと、問題であらねばなるまい。

國家が自己を救ふために取るべき新たな道は何れに在るか、それを見出すのが問題であらう。

第七節 國家の正道

日本國家が、この窮極の自己破壊の場合に於て、己を救ふ唯一の道は、單に邪道を去る一事につきる。邪道を去るのは、嘘を去つて眞に就くを意味するのである。

最近日本國家は國家生活本位から社會生活本位へ鞍替しつゝある。その國家生活なるものは、嘘を本位とした生活であつた。個人主義の立場から、目的のために手段を選ばぬ行方が、その生活振りであつたのだ。

國家が今度乗替へる社會生活とは何ういふ性質かといふに、眞に生きる生活であることを忘れてはならぬ。

例へば、銅御殿に贅澤三昧で暮らさせて貰つてゐた奥方が、御殿を棄て、夫を去

つて飛び出した社會現象は嘘を去つて眞に就いた行方である。社會は眞でなければ生きて行けぬのである。

又工場生活の中を見れば、よくその消息を傳へ得る。例へば女工にして見ても、雇主から小言でも喰ふ場合に、是非善惡の標準論では女工の心は感服せぬ。その心を感服さすのは、單に眞偽の標準丈けである。彼の人は口にあゝいはれるが、あれは嘘か本當か、之で勝負がつくのである。縦令惡でも非でも眞ならば通る。反對に善でも是でも嘘ならば通らぬ。

日本の社會には邪道の祟で、幾んど全部に分離作用が行はれてをる。その最も大なるものは、中央集權弛緩の結果、地方分權熱の昂進である。

帝都の震災は、この熱を惹起すに、與つて力があつた。當時官憲の間には、それまで絶對な中央集權論であつて、急に地方分權論者に變つたものが少なくない。地方長官の椅子にあつた當時の人間はよく分つてゐやう。

長野縣では最近縣會で知事公選の決議をした。その以前には縣民が知事を初めその部下に直接行動を取つた出來事があつた。

以上の例は凡て專制から自由へ、國家生活本位から社會生活本位への、國家の方向の轉換と取れる。

併し、この國家的變化の現象は、決して俄に、日本に勃發したのではない。明治維新の解放から、徐に社會の各部に、浸潤した結果と見ねばならぬ。

例へば東京の丸ノ内には、耳隠、厚化粧、プラチナ入齒式の婦人が見られやう。非常な新しい風に取れる。けれども東北のやうな端々では、お齒黒染めて、金の入齒で、菅笠被つて、自轉車を飛ばす婆さんを見る。之に較ぶれば、丸ノ内のハイカラは追附けぬ。

一體日本の昔の婦人が、結婚後、眉を剃り、齒を染めた動機はといへば、周圍の注意を引かぬため、自然の美を犠牲として、夫へ向ける心の眞と取られぬことはな

い。

凡ての場合、統一の本義は犠牲を本とせねばならぬ。婦人が夫に對する自己の美の犠牲は、統一の主たる精神の擁護である。

近來の日本社會はといへば、夫の立派にある婦人が、往來をテカつかせて、周圍の注意を一身に集中することに、浮身をやつしてをる風が、ありくくと目に見えるではないか。

如何に人妻なればとて、美しいものを美しくないと、見て行く譯には行くまい。若し道行く人間が、普魯西式の國家のやうに、嘘で通るものならば、美をも醜と見るであらうが、解放された社會の人間はさうは行かぬ。

それで野心の旺盛な男、若くは嘘から眞に憧憬してをる女、さういふ間には、道路の一瞥、必ずしも物言はぬとも限られぬ。家庭の分離は、夫人の解放された自由、並に回復された自然美が、與つて力があると考へられる。

明治維新後、形式と物質とを本位として、邪道に陥つた日本國家が、社會に與へた影響は、今日國家が鞍替のため、新たに受けんとする影響、そのものと見て差支あるまい。

維新後の日本社會では、一家は統一の本體でありながら、形式的な自由解放の結果として、二途を踏まねばならぬ勢を醸して來た。一家に對する犠牲の念はそのために失はれた。夫もするなら妻もする流義が生じたのは、その二途のためである。一口に言へば、形と物とに囚はれた、一家組織の分裂である。

組織の働は統一と分化との共同調和から成らねばならぬ。それで一家の組織の中に二途あるのも、或は國家組織の中に二途あるのも、それは自然の生命ある活動體として、當然のことであるのである。けれども、そこに徹底した理解を缺く場合には、二途の存在が、却て一家一國を破壊分裂さす働をなすのは必然である。

隨て國家が嘘から眞へ移る場合には、その一點に深い注意が必要視される。嘘は

人爲を本位として起り、眞は自然を本位として成る。國家が邪道を棄て、嘘を去り眞に就くのは、言ひ換ふれば、自然へ還る意味である。少なくとも日本民族の組織にかゝる國家は、自然の眞情の結晶であらねばならぬ。國家の正道は正に自然の道であることを忘れてはならぬ。

第八節 國家生活本位の國家

國家生活本位の國家は消費の主體として認められる。その國家は租税に生きる。隨て國民の負擔が物質的に重い。

舊式の國家は大抵國家生活本位であつた。その國家の成行は大抵滅亡に歸してをる。

この國家は絶對專制統一を主義として立つ。さうして社會を認めず、個人の自由を滅却して、國家の利害一天張りで押通す。

かゝる國家は兵力を要する。その兵力は、外敵に備ふるよりは、寧ろ内敵に備へるのである。かゝる國家は、國民に對して、赤子の名を蔽はせながら、その實は敵意を以て迎へてをる。

國家に對する國民の態度が、假に真情を發揮せんとする場合でも、國家は一種、自己内心の恐怖の影に囚はれて、所謂疑心暗鬼を生ずるのである。

かゝる國家は、外物に支配され、自己破壊に陥つた個人のやうに、内心焦慮煩悶一種のヒステリ化して、自失の極に達するのは必然である。

かゝる國家は、絶對な個人主義を主張して、周圍を悉く敵視する。その結果、自己の内的組織を分離破壊すると同時に、外的憂患を惹起して、孤立無縁の境遇に立到る。

かゝる國家の内部には、恰度その國家を代表するに足る、小さな國家が認められる。例へば一個の工場組織を例として見る。

その工場は必ず、個人主義の立場に於て、工場主本位の生活振を發揮してをる。さうして、その中に働く人間が、男工であらうと、女工であらうと、働く人間の膏血を搾取る行方である。

又かゝる國家の中の一家を例として見る。その一家では、一切主人本位で、主人は寝てゐて、食つて飲んで、賭博を打つて日を送る。その癖、家族は喰ふに一物なく、娘を賣るか、工場に前借で稼がすかして、さうして主人は尙ほ働かずに、消費一方に身を委ねる。

日本の國家生活本位一天張りの時代には、その國家の影が、日本全國到る所の工場に映つてゐた。又この工場の影は進んで貧しい一家の上に映つてゐた。尤も甚だしい影を見るのは、極めて少數とはいふものゝ、日本全國、凡ての家に、日本國家の國家生活本位の影は映つてゐた筈である。

その影の特徴は何かといへば、主は消費の絶對權威者たる面影だ。

日本は國家生活本位のために、主のために他の凡てが犠牲にされてゐたのである。その犠牲は、名と形との美を残して、多數の人間が結核その他の營養不良の病に陥る。殊にそれは女工の身の上に一番多く現はれてゐる。

日本が弱肉強食の國として見られるのは、結局、國家生活本位の國家の影に歸すのである。一家でも繊弱な乙女を喰物の種子に稼ぎに出して、家の主が寝てゐて酒を呑む有様である。

その他、遊廓の樓主、藝者屋の抱主、生産工場の雇主、主の附くもの悉く弱者の肉に生活の基礎を置く。

國家生活本位の國家は、神權主義の國家を意味する。さうして、その國家では、一般に主は神である。

かゝる國家の組織を形造る各部の主は、大小の差別こそあれ、皆それ／＼神に等しい。その神は絶對な消費者の立場に立つて、生殺與奪の權まで有つ。さうしてそ

の絶對な消費を可能ならしむる力は、何所から來るのかといへば、それは神權の源から湧き出る紙幣なるものである。

かゝる國家の紙幣の本體は、國家主權に對する、國民の犠牲そのものである。隨て國家生活本位の國家は、國民の犠牲を絶對に強制する、社會を無視し、個人の自由を滅却する必要あるのはそのためである。

日本はその式を取つてゐた。勿論今は、それを放棄しかけて、方向を轉換しつゝある所である。でなければ、その式で破滅した露西亞の轍を踏まぬといひ得ぬ。でなければ、普王の運命に國家の主を陥れるかも分らぬ。

日本の國家はこの一點で窮極の立場に立到つてをる。その立場を脱せんとして、日本は急に國家生活本位から、社會生活本位へ、方向轉換を試みつゝあるのである。

第九節 社會生活本位

何が一體、國家が新たに取らうとする、社會生活本位なのか、その社會生活そのものゝ意味が、容易に分りかねる。

一體世の中の進歩とか、或は學問の發見とかいふ事柄は、新たな主を見出す一事に歸するといふ。主とは勿論神である。不思議な威力の主だ。それで新たな主さへ發見すれば、世の中の行詰は展開出来る道理である。

從來國家生活本位で行詰つて來た世の中を、今度は社會生活本位で展開して行くといふ。國家も不思議な主であつたが、今度の社會も亦同様な不可思議な主に相違ない。

新たな發見のその社會生活なるものは、一體何かといふことは、本書に於ても前々述べたことのあるやうに、極めて深遠な意味を有つ。社會といふものゝ實在は釋迦の極樂、基督の天國同様に、各自一身の心の内にあるものと認めねばならぬ。

その社會の發見は何うして出來たかといへば、國家生活本位の絶對專制からである。強者のために餌となる多數の弱者を救はんとする、新たな世界が即ち社會である。

獨り國家の主權者に對する強弱關係でなく、或は工場主と勞働者間の強弱關係でもなく、或は又一家の中の主人と家族との強弱關係といふでもない。

社會の發見を促した動機は、極めて廣く考へねばならぬ。その中には自然の男女の強弱關係もあれば、或は又長幼の強弱關係もある。その他、尙ほ進んで考ふれば人間個々一身の頭と心との強弱關係もないとはいひ得ぬ。

何うして一身の頭と心との強弱が認められるかといへば、科學本位の教育、智能本位の文明、かういふ時代の趨勢が、腦力を心力の上に進めて來たことは争へぬ。それで一身に就いて考へてみれば、常に心は頭の支配を受けて、外物本位に精神が惱まされる。頭と心との強弱關係の認めらるゝのはそれである。

元來國家が社會に對立して、その存在の認めらるゝ所以はといへば、國家の外に

外界の刺戟を防禦する働のものはないからである。國家は全く外界本位にその存在の價値が認めらるゝ。隨て民族間の争鬪の激甚なる刺戟が、民族に國家組織を必要視させる譯である。

個人の場合でも、解放された個人が、自由競争の下に、生存競争を行へば、何うしても外界本位に生活の必要を認めて來る。その必然の結果は頭萬能主義を主張する。

個人主義の國家生活本位の國家が発生したのは世界の時代趨勢の必然の産であつた。

今日では世界そのものが、自由解放の生存競争に惱を生じて、國家生活本位の行詰を痛感してをる。國際聯盟、軍備縮少、國際勞働會議、かういふ施設が世界的に行はれ出して來たのは、明にその間の消息を告げてをる。

一口に言へば、絶對な消費本位の國家生活は、人道破壊であるといふことであ

る。それ故に、人道維持の目的を以て、社會生活本位の新たな方針に國家を向けて行かうとするのが、世界の新たな時代趨勢と見られるのである。

社會は従來、國家の絶對消費に對して、絶對生産の立場に置かれた。その反動が勞働運動と化し、勞資間の問題を惹起してをる。

實際、生産に従事する人間は、消費に對する權利を奪はれてをるのである。勞働問題の真相は一に生産者の立場にある勞働者が、奪はれたる消費の權利回復といふに歸する。

こゝに於て國家は考へざるを得ない。國家が社會生活本位に方針を轉じたといふ意味は、社會に消費の權利を回復さすと同時に、國家自身生産の義務を分つといふことではなければならぬ。

併しながら往々物には誤解を生ずる。親といへば子、右といへば左といふ、形式的な對立のために、その誤解が生じるのである。

親子は、時を本位に考ふれば、一體にして對立出來ぬ。又左右は前と後からの見方で差別を失ふ。その通りのことが、生産と消費との間にも成立つてをる。生産者は絶対に生産者ではあり得ない。又同様に、消費者もさうである。生産者は消費者を兼ね、又消費者は生産者を兼ねる。それが社會生活の本體である。

それ故に、縦令國家が、社會生活本位に方針を轉じたからとて、その國家生活を無視するものは解されぬ。若しさうならば國家は絶対な奴隷である。かゝる國家は成立たぬ。

第十節 絶対の相對

労働者階級は、實際の生産者たる立場にあることを自覺して、消費の權利獲得を主張する。併しそれは單に生産者としての立場に限る。その立場を離るれば、消費の權利は失はるゝ。若し労働者がその權利獲得を絶対に主張すると假定すれば、彼

等は同時に絶対に生産者であるべきことを主張せねばならぬ。さういふことは不可能である。彼等が奴隷に還らざる限り、さういふことは出來ぬ。

如何なる労働者といへども、生産に従事する間は消費の權利を主張し、又消費を行ふ場合は生産に對する義務を有つ。社會を共同生活の有機的組織と見れば、さうでなければならぬ。

この意味に於て、絶対の相對といふ關係が、社會の有機的組織には、必ず成立することを認めねばならぬ。

例へば生産に従事する間は、その労働者は絶対な生産者である。併し彼が家に歸つて家族と食事する場合は絶対な消費者である。隨て彼は自身一個人に於て、已に絶対の相對を認めねばならぬ。

世の中が需要供給の網を、廣く擴げるにつれ、この絶対の相對關係は、文字通りに無限に存在すると見て過らはない。一個の労働者の體に着てをる着物を見ても、

場合に依れば世界中の物かも知れぬ。又彼の手に依つて出来る品物が世界の何所で消費されるやらそれも分らぬ。

この絶対の相對關係は、形式本位の從來の頭では理解は出来ぬ。時を本位に考へる必要がある。

從來國家は絶対を主張して來た。政治的に縱令立憲の代と化しても、尙國家は絶対を主張する。

かゝる國家の絶対主張は、確に形式本位の過去の頭の産である。若し國家が時を本位に、自己の生命を考ふれば、從來の絶対主張は成立たぬ。國家の生命は、社會の生命と相對的に、成立の意義があるからである。

けれども、國家そのもの、理想に於て、絶対なしには、その理想が空に歸す。又同時に社會の生命も、國家の有無に關らず、絶対であるべきことは、議論の餘地がない。

現在國家の行詰は、自己の絶対を囚はれて、絶対の相對を認むる頭に缺くるからであるといひ得る。

自然には絶対を認むる。けれども絶対は絶対の相對に依つて保たれてある。自然には絶対の絶対は存在せぬ。

自然に還らねば、窮極の現状を展開するに道なき日本國家は、その頭に相對の相對を取入れ、物と形との世界から時の世界へ自己を見出すことが第一に必要視される。

國家は個人の大なるものである。その小なる社會的個人が、生産と消費との關係に於て、絶対の相對を頭に入れて、初めて勞働問題の解決の曙光が見出せるやうに國家生活と社會生活との間に惱める國家の現状は一個の小なる社會的個人の立場と同一に取れる。

かゝる觀察に誤なければ、民族の立場に立つて、自然の至情を發揮する日本國民

は、統一の新たな主を、國家並に普遍的社會の個人に認むることを絶叫して止まぬであらう。而してその統一の新たな主は、國家も個人も、共に絶對にして且つ相對の關係に結合されてあることを主張するであらう。

民族の立場からいへば、日本國家の主は、民族的血の中心であることを、本能的に、その心に抱いてをる。その事柄は、日本の國家は一身の情、言ひ換ふれば一族の血の結合であることを意味する。君民一體の國體とはそれだ。

不幸にしてこの至情が、誤られたる邪道に依つて、久しい間阻碍されてあつた。明治維新の志士仁人は、その中間物を取除くため、大義に依つて親をも滅して顧みなかつた。その大義は今日尙依然として目的を達せず居る。日本が新たな主を見出すのは、その大義の目的を完成する一事の外はない。

第四章 日本民族の血

第一節 貨幣問題

現代の社會に於て、民族の血を考に取る場合には、社會に流るゝ貨幣を問題として考へるのが第一必要事項である。

貨幣なるものは、社會組織を一個の有機體視する場合に、その働は確に血である。一個の體で血の流通せぬ所は破壊を免れぬやうに、社會組織の中では、貨幣の流通なき場所は破壊を來たす。

貨幣は社會組織に對する血の作用を行ふと見て差支あるまい。

今日の經濟社會の組織状態から見て、如何なる山奥の村落でも、自給自足の生活は見る事が出来ぬ。それで何物か貨幣に代はる性質の品物を作り出す。作り出す事が出来ぬ場合は、何所からか何物か金になる品物を漁り出して取る。

かういふ工合に、金の世の中になつて來たのは、經濟組織の分化の發達のためでもあらうが、主として資本主義のためである。

資本主義は、金を手段に、社會組織の活動を刺戟するが目的である。資本主義のその目的は、何うして具體的に達せられるかといへば、それは言ふまでもなく、生産と消費とを盛大ならしむることに依つてゝある。

一般に社會の人口は、平和に依つて増加する。平和の外には、資本主義は落着いて目的を達し得ぬ。それ故に資本家階級は概して平和主義者である。

平和の下に資本が落着いて働く場合は、第一に金利の率が低い。隨て生産能力を増進さす設備が得られ易い。

資本が働けば、それに伴ふて勞働の需要が増す。隨て社會には貨幣の流通が増加する。言ひ換ふれば社會に血の素を供給する量が増すのである。

かくして社會に人口増加の基礎が置かれる。貨幣問題はそれ故に、民族の血と第

一密接の關係あることを知らねばならぬ。

貨幣問題は、かくの如く、民族の血と密接關係を持つことを知る以上は、その量ばかりでなく、又貨幣の質をも深く注意する必要が認められやう。

一概にいへば、貨幣は貨幣だ。紙幣の拾圓も、金貨の拾圓も、値段に於て違はな
く思はれやう。事實さう思ふ場合が少なくない。

けれども眞實その兩者は大に違ふ。紙幣は移動の自由に限りがあるが、金貨はそれに限りがない。それが兩者の異なる著しい點である。例へば、紙幣の持主は日本の國土を之れを旅費に自由に移動し得られても、その國土を一步外へ歩み出せば、その紙幣は役に立たぬ。従て持主の移動は拘束される。

之に反して金貨の持主は、日本の國土は言ふに及ばず、日本を越えて、世界何れの國に入らうと、その持主の移動は自由である。金貨は持主に普遍的な移動の自由を與へる。

移動の自由と束縛とは、何を人間に意味するかといへば、民族の血の分配の自由と束縛とを意味するのである。紙幣國では、何うしても民族の血は固結する。之に反して金貨國では、民族の血が活動する。

而已ならず、紙幣と金貨との質の相違は、血の保存の上に大なる働の相違を來たす。

血の保存に必要な事項は何かといへば、それは努力の結果の蓄積である。貨幣の働は、その努力の結果の蓄積を營む。所謂貯金なる人間の行爲は、貨幣をその働に向けるのである。言ひ換ふれば、金を自己一身の血の永續の手段に使ふか、若くは子孫の將來の計に役立てるのである。

その場合、紙幣を努力の結果として受取る場合と、金貨を受取る場合とに依つて貯蓄する働に相違が出て來る。全くさう言へば嘘のやうに聞えやう。けれども、深く人間の心理に問へば、決してそれは嘘でないことが分る。

例へば賃金として、袋の中から紙幣を見出す場合と、金貨を見出す場合とを、比較して想像すれば、直ぐ分る。第一手に握り方から違ふ。

さうして次に買物をする。手袋一つ買ひたいと思ふ場合、紙幣ならば何の氣なしに品物と交換する氣になれるのに、金貨の場合は、一寸と控える。さうして品物と金貨の光を對照してどもみるやうな氣分になる。

貨幣は普通交換の媒介物には相違ないが、その媒介物は古から美的性質を持つものに限られてゐる。金貨が貨幣として優秀な譯もそのためである。一種の美術品たる實質を有つ。

又紙幣でも、金貨に較ぶればお話しにはならぬが、他の紙片に較ぶれば、美術品らしく取れる。又穢いクチャ／＼な紙幣と、手の切れさうな紙幣とでは、同じ紙幣でも値段が違ふやうに取れる。さうしたものである。

それで貨幣の質次第で、買物を手控える場合が起る。惡質の貨幣ほど手から離

れ易いのである。随て貯蓄の上に大にその貨幣の質が影響する譯である。

地方から都へ出稼に出た、地震當時の大工等でも、紙幣の代りに金貨が勞銀に仕拂はれたならば、貯蓄心も多く刺戟され、病毒の感染も少なくてすんだやうに取れる。全く思へば貨幣の罪である。

かう考へて來れば、民族の血に及ぼす貨幣の影響は決して輕視出來ぬであらう。紙幣の如きは、或場合には、勞働者の膏血を搾取する機械のやうに取られる場合さへある。それは極端な言ひ方であらうが、併しまんざら嘘でないことだけは明白である。

第二節 人口問題

佛蘭西革命當時、英國でマルサスの人口論が公にされた。それと同時に又アダム・スミスの國富論が出た。大方双方共佛蘭西の内情に刺戟されたものゝやうである。

マルサスの人口論は、民族の幸福は人口調節に依らねばならぬといふ。スミスの國富論は民族の幸福は生産の増進に依つて出來るといふ。マルサスは生産が殖えやうが、人口が増加すれば、勞働者の一人宛の取る賃銀は減るといふ。スミスは、多く生産さへすれば、人口は増しても幸福は減らぬといふ。兩者は共に等しく民族の幸福を目的として、議論の根據を異にしてゐた。

今日の日本に、この兩者の議論は、適切に當符るやうである。日本には今人口調節の必要を説くマルサスのやうな論究もあれば、又他の一方にはマダム・スミスのやうな、生産能率増加の論者も少なくない。けれども、日本の今日の論者の性質が果してマルサス及びスミスのやうに、純な民族の幸福本位であるか、何うか疑問である。

マルサスは、兎に角、周圍の攻撃を厭はずに、世にあの論文を出した。宗教心の固かつた當時の英國社會では、人間の血は神の血と信じてゐた。その證據には、尙

ほ今日でも、種痘を忍んで、動物の血を神の血に混じたくないといふ位である。

その英國のあの時代に、人口調節論を公にした。人口調節は、英國人の意味でいへば、神の血の排棄である。大なる背信的行為と取れる。

今日の日本の人口論者は、如何なることを論じても、マルサスの受けた攻撃は受けぬ。而已ならず、日本の過去の習慣からいへば、人口調節論など、鼻の先で笑はれる位なものである。

事實、日本では、封建時代、二人以上の子供は、神に返してしまつたものである。入らぬものを神様が無理に、おさづけ下さるといふ氣持である。

マルサスは、人口が殖えれば、生産は増しても、一人宛取るべき賃金が減るために、民族の幸福は減るといふことを主張する。この議論は貨幣論に俟つ必要がある。

一體貨幣は何であらうと、直接それは生活には役立たぬ。又假に貨幣の量が増し

たからとて、その貨幣の購買力が減じた場合は、何の價值もない譯である。實際生活の眞の價值は貨幣以外のものにある。

アダム・スミスは、生産能率の増進に依つて、この生活の眞價值を増すことを主張する。確に一つの主張である。

けれども、その主張は、アダム・スミスのやうな純な民族の幸福主義者にして、初めて價值が認められるのである。

アダム・スミスの生産能率増進は資本が伴ふ。その結果、不純な慾望の資本家は、スミスの生産能率増進の効果を、實際の労働者に分與せず、資本の生ずる利益として、私してしまふ悞があるのである。

資本に對する今日の社會主義者の攻撃は、結局、主として、その一點にあるのであらう。この點に依つて、生産の増加は必ずしも、民族の幸福と一致せぬことが主張される譯である。

併しながら、マルサス時代の人口論の論旨とする所と、今日の人口論の論旨とする所とは、雲泥の相違である。今日は人口の量よりは質に重きを置いてをる。實際有毒的な人口が幾ら殖えても、役に立たぬばかりでなく、却て民族の重き負擔であり且つ害毒である。かゝる人口は、民族の血の安全なる保障のため、徹底的な道を講ずる必要のあるのは争へぬ。

人口の調節は、貨幣の調節に伴ふものと考へられる。悪貨の濫發は、悪質の人口増加を伴ふ道である。

又アダム・スミスの生産増進は、その生産の道如何に依つて、人口に大なる關係を有つ。若し單に器械力に依つてのみ、生産が行はれるならば、スミスの議論は正當である。けれども生産増加は、労働の消費を伴ふ。その労働の消費が人口の質を惡化するの争へぬ。

今日各國工場労働者の保護に努め、幼年工及び婦女子の労働時間に制限を加へる

必要を認むるのは、スミスの偏重を制御するのである。

思ふに、民族の幸福を計り、その血の保全を目的とする議論でも、容易には一致が出来ぬ。併しながら、人口問題の如き重大な性質の問題に對しては、公平な立場の論者が、公正無私に、民族の血の保全を本位に、徹底した解決の道を開くことが必要である。

第三節 性問題

性問題は、全く自然問題である。一口にいへば、自然の至情そのものゝ問題といふことが出来る。民族の血に就いては、恐らくこの問題ほど、內的に深い關係ある問題はなからう。

性問題は最近日本で可なり矢筈敷い。けれども、よく考へれば、その問題の發足點が、一部は人口問題、一部は生理問題、一部は營業問題と取れる。

實際日本では性問題は注意されなかつた。餘り珍しくない問題であつたからだ。何所の電柱にも、子宮病、淋病、等々の廣告が目に着く。又交際場裡でも、下體の語に公然花が咲く。而已ならず、出齒龜せずとも、往來から裸體姿の湯上り女の肌も見える。男が平氣で裸で女の前も歩けば、又女は平氣で男の前で立小便を見せつける。之で性問題に何う興味が引かれやう譯があらうか。

尤も人間の體は、自分でよく自分の體を考へれば分るやうに、男女兩性體であつたものに相違ない。男の體は女の分を削られた形である。それで長く女の自然の眞から離れて、孤獨の生活を送る間には、實際女の月の壽血を自覺して來る。

男性が女性に對する眞情は、自然に己の内にある、女性の缺陷を充足するための働のやうに取れる。隨て性の問題は、他動的でなく、自動的に出發點を取らねばならぬ性質のやうである。

性問題は、男にしる、或は女にしる、人間として、自己の内にあることを知らね

ばならぬ。若し個人として男女共に、内に自然の兩性味を調和して、過不足なく平衡を保たせ得る場合には、性より起る問題は、個人として全く超越される道理だ。

併しながら、單に性問題を個人的煩悶、若くは戀愛の上に限るのは、民族の血の保全に對する問題解決には縁が遠い。個人的煩悶、若くは戀愛に關する問題は、性問題の範圍よりかも、寧ろ社會の專制束縛、自由解放方面の範圍に屬する。言ひ換ふれば、個人として、周圍の壓迫、若くは羈絆に打勝つ丈けの勇氣のない人間に、煩悶若くは失戀が生ずるのである。

兎に角、性問題の核心は、自然の眞の發揮といひ得る。男が女を愛する場合に、女がその男に身を委ねる絶對條件は、男の愛の眞情それ一つである。假令愛して物を與へ、金を貢いだからとて、女は決して心をその男に委ねはせぬ。金で圍はれた女の心は、誰かしら、その心を慰むる友を求め。さうした例は日本に多い。

又血の問題についての性問題は、單に男女の愛の眞情に依る結合ばかりでは解け

ぬ。女が必ず母とならねばならぬ條件が附く。

元來女は弱い。女が男の愛の至情に一切己を委ねる所以は、男の強さに結ばれんがためだ。女は弱い。併しながら母は強い。さうして母となり得ぬ女の強さは信仰であり、愛である。それは文豪ヴィクトル・ユーゴーの言葉の通りである。

彼はかういつた。女は弱し、母は強し。女は弱し、信仰は強し。この言葉を深く味へば、結局、血を本位としての、自然的本能の愛の至情に歸着する。子と母との間は勿論のこと、女と神との間も同一である。神は天の父として信せられてある。血についての性問題は、それ故に、自然的本能の愛の至情唯一つに依つてのみ解決出来る。一口にいへば、性問題を解く鍵は、人間自然の眞そのものである。

若し男の鐵拳が、男の自然の眞情そのものである場合には、その鐵拳を喰はされて飛び出すやうな女は、今の世の中にでもありはすまい。

又女の方からいへば、眞情なく、女を保護するに足る勇氣なき男と解した場合、

その男を離れて、他の理想の道に就くのは、女に取つては至當過ぎるほど至當である。

こゝに最も深い注意を要する一點は、愛と戀との差別である。愛は自然の眞情から湧く保護の力である。之に對して戀は自己の缺乏を充たす情慾である。愛は如何なる場合に於ても、裏切り若くは復讐の害を起さぬ。けれども戀はそれを往々惹起す。

日本の性問題は何に重きが置かれてあるかといへば、一口に戀愛とはいふものゝ、愛は薄い表皮であつて、その内實は戀である。喩えていへば、恰度日本の西洋料理のオムレツ式である。卵の表皮は美術的、藝術的な風を装ふて、内には馬肉牛肉が切り込まれてある。肉慾至上の戀愛を皮肉に表徴するものはこのオムレツだ。

さうして又日本式の從來の習慣に本づく結婚は、何といつても不見轉式に出來てをる。日本の家内は卸賣の淫賣だといふ惡口が世間にある。さういふ惡口を吐かれ

ても仕方のない點が、日本の家内なるものにはないといひ得まい。

日本式の結婚は種子取りに出来てをる。民族の血の保全の上から見て、大切な事柄である。ではあるが、その種子の範圍は、民族といふ範圍が本位でなくて、一家といふ範圍が主である。それで場合に依つては、民族の血が、一家の血のために、犠牲にされぬ候ないとも斷言出来ぬ。大なる注意を要する點である。

明治維新の標榜は、大義親を滅するにあつた。一家のために民族を犠牲にするは維新の標榜を裏切るものである。親のために大義を大地に棄てるものである。

種子取結婚の代表的なのは婿養子だ。貧乏人の家に、婿養子の望手はなからうが、金持の家には往々それがある。男の方からいへば、出世の踏臺に取れる。さうしてかゝる男は、秀才で美男、それで女の方からいへば、誂向きの形である。

けれども、その方の結果は、何うも好く行かぬのが多い。その一例は天下の金穴安田家が示してをる。つまる所、形と物とを本位として、自然の眞情、愛と勇との

缺乏から起つて来てをる事柄である。日本式の種子取本位の結婚には、凡ての場合この缺陷が附纏ふ。かゝる男を女の方では卸賣の男地獄といふ。

結婚は今日の如き社會では、男女が人間として、互に一生の伴侶たることを求める機會たることは確である。それ故に、この機會を廣く、均等に、且つ自由に保つ必要あるは言ふまでもない。自由結婚の尊重さるべき理由は主として之である。

かくして結婚は二様の目的から解釋して行くことの必要が認められる。一つは人間の血の保存、他の一つは男女相互の缺陷の補強。

以上の二つの目的を結婚に達せさすには、男女何れを本位として、結婚を行ふべきかの問題が起る。日本では男本位である。英國の如きは女本位と取れる。

日本の實例から見れば、矢張女を本位とした方が、結婚の目的を達する上に有効と取れる。その理由はかうである。

日本は情死國といひ得る。その情死は女本位で成立つので、男本位では成立たぬ

が一般だといふ事柄がある。性問題は女性中心でなければ解決は出来ぬ。日本の男本位の結婚には何う考へても無理がある。自然に還るには、矢張女性中心主義の結婚が至當である。

第四節 性的女性中心主義

確に人間は主として女性の力に負ふ所が多い。普通、世に偉人と稱せらるゝ人間は、賢母の力に依つてである。賢母の力は子に對する眞の力の外はない。

それは兎も角として、子が母に負ふ所以は、十箇月の胎内發育から、生後の哺育期、その間の母の力は想像の出来ぬものである。

子を健全に産み、それを健全に育てる一事は、民族の血の保全に極めて重大な關係を有つ。その仕事を遺憾なく遂行するには、第一に健全なる母性を必要とする。それには健全なる女性を求めねばならぬ。

日本の女性は何う最負目に見ても薄弱である。體質的にさうであるばかりでなく、精神的にさうである。

尤も女性の方からは、日本の男性は薄弱だといふことがいはれやう。確に現代の日本男性は薄弱だ。體質も精神もさうである。

社會の女子は男子の影響を受ける。それで日本の女性は薄弱な男性の影響を受けて薄弱だといふ事になるのであらうか。

所が又社會の男子は女子の影響を受くること夥しい。殊に平和の續く時代にさうである。

日本の例でいへば、幕末維新の京都の藝妓は、志士の感化を受けて、言はゞ恰度今日の京城のキーサンに類するものがあつたやうに思はれる。今日のキーサンは所謂半島志士の感化に一種盛な氣概がある。

日本の昨今の長袖者流は、逆に藝妓や女優の感化を惠まれてをるではないか。そ

の他、學の學生まで、その勉學の目標は女性にあるといふことをいふ。男性に對する女性の力は決して侮れぬ。

それに一般日本の女性は薄弱である。その薄弱化される原因は、他に直接間接、種々あるには相違あるまいが、その中で一つ特に注意に値するものは、日本社會の性的男性中心主義である。

日本の古代の習慣からいへば、女性中心主義であらねばならぬことは、民族の血の中心として、伊勢の大廟を奉祀する一事を以て證明せられるやうに取れる。

その古代の習慣が如何にして失はれたかは、王政衰へて群雄戰亂の代と化したからである。戰國時代は男性本位に一切の事が行はれた。武夫は野に臥し、刀を枕とするが習慣とされてゐた。女の膝など夢にも見ることは出来ぬのが常であつたであらう。

太平の代は全く趣が違ふ。太平の代は太平の代らしく、習慣も亦古の王政時代に

返るが至當である。明治維新は王政復古を標榜しながら、何故に性的方面に、女性中心主義を回復しなかつたのであらう。

日本の今後は産業本位に立國の基礎を置くといふ。若しそれが日本將來の國是とせらるゝならば、少なくとも日本國內は絶對平和を保障する必要がある。平和の下にのみ産業は發達し得べき素質を有つからである。

日本は國家として、將來周圍の變化刺戟に應ずるために、國民皆兵の實は失ふ筈はない。併しそれと、國內群雄戰亂の代とは、まるで問題が別である。國家として外部に對つて自衛の道を取る場合は、男女一體、兩性に差別は認めぬ。かの古代ローマのために全滅されたカーセージの歴史を思へばそれが分る。

日本將來の國內を本位として、産業立國が國是とせらるゝものとすれば、國內は絶對平和が絶對必要條件となる。さらば性的女性中心主義を回復して、日本古代の習慣に返り、民族的血の保全の安全なる道を取るのが、適當の處置と思はれる。

戰國の習慣は性を無視した。野に臥した武士は、恰度佛道に歸した僧侶が、性を無視して、同性に渴を醫したと同様の道を踏んだ。不自然も亦甚だしいのである。性的男性中心主義は、見方に依れば、ソドミの足跡を踏ます嫌がある。日本に於ける極端な一例は島津藩の男色に見ることが出来る。島津藩は今尚ほ同藩固有の薩摩琵琶にある如く、極端な性的男性中心主義を取った。同藩の跡は今日如何なる状態かといへば、確に性的には腐つてをる。一種の天刑を受けた日本のソドミである。一般日本民族に取つては、一重大事件の跡を思はずには置かぬ。

第五節 男女兩性の働

民族の血に關しては、日常生活に於ける男女兩性の働に對する自然の分業を明かにすることが肝要である。

普通の社會では、男が女の取るべき仕事に従事して、却て女が男の取るべき仕事

に従事する場合がある。確に一種の變態生活に相違ない。それといふのは、一つは社會的生活組織の不發達、一つは男女兩性の個人的競争、又一つは人間としての無自覺の致す所である。

日本に於て、往々肉眼に觸れる地搗仕事は、大きな聲を張揚げて、多勢の女が腰を曲げて綱を曳いてをる。發達した社會には見られぬ藝當である。

英國では婦人が議會に出、政府の椅子をも占める。日本などには見られぬ。男女兩性の激甚なる個人的競争の社會の産である。社會に於ける女の權利を確め、女の立場を強める必要からである。

又一般世界の風潮として、男女共學を獎勵して來た。共に二本の脚で立つ人間として、男のし得ることは女もし得る。又男女同じ道に就けば互の理解も進んで來る。その見地から男女共學は理想的と見える。けれども人間は、同一道に就けらるれば、互の力の競争が落ちである。又男女兩性は、自然が、同型に填まらぬやうに

仕向けてをる。自然は男女を矛盾した型に填めた。併しながら、その自然の矛盾なしには、眞に男女の性的働の一致協力は不可能に終るのである。随て見様に依れば男女共學は性的一致協力の破壊とも取れる。

兎に角、男女兩性は、一見して誰にも分るやうに、見掛から違ふ。男らしい男、女らしい女ほど、一見して兩者の區別は鮮明である。その區別が不鮮明な男女は、到底性的には話にならぬ。

男らしい男といふのは、その面相からが、外向きに出来てをる。到底内に向く柄ではない。又それと對照的に、女らしい女といへば、その萬事が内向きに出てをる。外には向かぬ。かゝる男女は一對として、誰が見ても好一對に取れるであらう。必ず好く一致する。

人間は、自然に、その根本は兩性一體の組織であつた筈だ。それが自然の進化に依つて、こゝまで迎つて來てをるのである。その必要は何からかといへば、一方に

は活潑な外部に對する移動、他の一方には靜肅な内部に於ける安定、この二つの作用である。

以上の二つの作用は、一つの型に填まつたやうに、同様には行はれぬ性質である。それで自然の進化は二つの型に當填めた。さうして外部に對する移動本位の部分と、内部に於ける安定本位の部分とを、判然區別して進化の途に就けたのである。男女の別はそれだ。

男の働は、自然に、周圍の變化に適應して、内部を保護するが主たる目的である。又女の働は、自然に、男に保護されつゝ、血の保存と自己延長とを行ふのが、目的の主でなければならぬ。

女が行ふ血の保存と自己延長とは、男女一體の人間が本位である。言ひ換ふれば、男女兩性の働は、性の差別を超越した、自然の人間本位であることを認めねばならぬ。

隨て、何れを中心として考ふべきかは、單に標準の問題である。併しながら、普通の形式に於て、標準と取らるべき方は、安定の方にある。この意味から、性的に女性中心本位の方が至當のやうに取れるのである。超越した立場からいへば、そんな本位などありはせぬ。地球上の人間が、上だ下だと騒いでゐても、その實、超越した立場からは、そんな上下が何所にあるか愚の骨頂であらう。

第六節 住宅問題

日本の性は、國の初の二柱の神が、鵲鶴に教へられたと言ひ傳へる。所が日本の家は、矢張、小鳥に教へられたものだらうといふ。木と土と藁とが家の材料である。その構造が、さながら小鳥の巢そつくりである。

この日本の住宅問題は、鳥のやうな生活の、所謂無産者階級には、實際重大問題である。獨身か、それとも夫婦共稼の人間かならば、何といつても始末がしよい。

けれども、子供のある人間では、何うしても一定の住宅が必要である。

國民の義務として、子供の教育といふことから見ても、住宅の確定といふ一條件が先に立つ。所が、その住宅が、さういふ人間には、確に一種の血の搾取機械同様に取れる。鬼のやうな家主にでもかゝらうものならば災難である。

日本の住宅問題は、何うしてさう、無産者階級に無理があるかといへば、日本には、利喰生活者が權力を以て、金利を高めてをるからだ。

日本の利喰生活者階級の中心は、大名華族の特殊階級である。明治維新の特産として、日本國民の上に重い負擔となつてをる。

日本の住宅難、無産者階級のために、血の搾取機械視されてをる住宅の問題は、この重い國民の負擔から先に取除かねば、到底解決の途はない。

さらば、その住宅問題は、民族の血と如何なる關係を有つかといへば、住宅は一般に人間の巢であるからだ。若し人間が鳥のやうに、木の枝、畑の隅に、巢を造り

得るならば、別段住宅問題は起り得ぬ。何分にも知つての通りの人間である。鶺鴒の眞似も出来ねば、又燕の眞似も出来ぬ。

所が、人間らしく住居せうとすれば、地面の上に建てられた家を要する。地面には所有主があり、又家には家主がある。

何所を歩いてみても日本では、汗水垂らして懸命に働く人間に、金持は出来なくとも、地主家主の懐丈だけは暖く肥つて行く。之は決して間違のない事實だ。

これらの地主家主等は、何を拜み、誰を神と思ふかといへば、大名華族である。大名華族が棄てた土地と、大名華族が高めてをる金利とが、地主家主の寶である。大名華族は確に神だ。

さて、その住宅は如何なる風に出来てをるかといふに、昔の征服者が、被征服者を統一した時代のまゝの風である。家の中には、少なくとも性的方面から見ても、何の自由も與へられぬ。

英國の公園には白晝公然男女が相抱いて横臥してをるのが見える。日本では公園には禁物でも、家の中は禁止区域といふ譯には行くまい。併し日本の家の中は公園と見て差支はない。性には少しの自由も保障されぬ。

それでゐて、何うして日本の家で子が出来るか、疑問の種子である。よし又出来た所にしても、碌な子供の出来やう道理はない。日本の家屋は拘束の家屋である。夫婦安心して寝てもをれぬ。性的には常住不安に襲はれ勝ちである。それで何うして落着いた子供が出来やう。

日本の子供は、概して、こせついてをる。さうして神経質に化し易い、大人もその通りである。それは、産れる前から、さういふ風に造り出されて来たのである。人の罪でなく、家の罪である。家とは人の直接的な環境である。

環境は人を變へる。日常坐臥、直接の環境が、人間の最も微妙な働に、不安の衝動を與へるならば、その結果たるや知るべしである。

若しこの問題を、民族の血の保全の上から、公正に論ずるならば、眞に重大問題である。その重大問題を犯せる罪は何れにあるかを探究すれば、勿論地主家主にあるは言ふまでもなく明白ではあるが、その地主家主を助け、又助けつゝある彼等の神の罪をも見遁してはならぬ。

民族の血の問題から見た日本の住宅問題は、かくして維新の大義に立返つて、徹底的に解決されねばならぬ性質である。

要するに住宅問題の核心は、第一に金利問題、第二に自由問題の二つに歸する。所がこの二つは征服者と被征服者との間の統活關係から發してをるのである。隨てその關係を根絶せざれば、繰返し芽を生じて來る。同一事が違つた形で發生するに止まるのである。この意味からいへば、明治維新の標榜にかゝる、四民平等の理想實現唯一つに依つて、問題は解決される。

第七節 食糧問題

限りある地球上の範圍に於て、限りなく人口が増加すれば、天から食糧が降つて來ねば、食糧問題の起るのは分つてをる。その地球上で、諸種の民族が分割的に領土を占めて、各自の血の保全延長を努めてをる。

その中で、日本民族の領土はといへば、民族の血の保全の上から見て、極めて割の悪い分前を有つてをる。年々殖え行く人口に、食糧問題の叫は日一日騒がしさを増す。

所が、實際、日本の土地を直視して見れば、その騒に應ずる丈けの努力と工夫とが拂つてない事實が見出せる。

一例を挙げれば、日本が全體として、天恵に乏しいといふやうに、東北地方でも同じことを言つてをる。恐らく日本全國を通じて、東北が一番天恵に乏しいやうに

取れる。又その中でも特に天恵乏を叫ぶのは岩手縣である。

實際岩手縣に就いて見れば、驚くべき事實を見出す。その事實は之が日本の内であるのに、國民の努力工夫の到らざること夥しい事實である。

先づ東北本線に沿ふ北上川筋の平地を見る。こゝは米の産地である。その場所に昔の街道が通つてをる。さうして、その街道の所々に、纏つた町や村がある。それらの町村に入つて見れば、家はまるで腸に寄生する十二支腸蟲とは、この式かと思像させる。昔の殿様の行列や、旅人のお流れにありついて、居喰して來た人間の生活様式そのまゝである。居喰はまだしもとして、その家の奥行の長さ。まるで戸々榮螺の尻の限りないやうである。

一體に、この地方は、榮螺式の生活を、理想とでもしてをるやうに取れる。自分の防禦には抜目がない。隣同士角突合ふ所、移動の自由を平氣で無くして、流れて側に來るものにありつく風の所など、榮螺式である。

この生活様式に、努力と工夫との新たな道を開いたならば、北上川沿道の生活には、まだく餘程の餘裕が見出せる。第一、今の時代に、二里や三里置きに物資集散の町は不經濟も甚だしい。そんな消費本位の人家を潰して、生産本位の田地か、若くは工場に變へるが、時代順應の最も適切なるものである。

殊にこの地方は、一帯に水田に適した低地で、水害の惧もあれば、又極めて不衛生的な土地である。そんな土地に、わざく人間を固定させて置かなくとも、その附近には幾らでも高燥な土地がある。こゝに人間生活本位の住宅を組織的に建造する工夫をするが可い。

問題は資金だといふ。資金は商賣人にこそ神様だが、民族の血の保全には道具である。資金がないから敵に攻められて戦争せぬ民族が何所の世界にあり得やうか。北上川筋の町村の生活問題は、惡魔に對する交戦である。民族の眼からは資金問題はない。

次に所謂三陸沿岸地方の漁場を見る。こゝには魚が、時々不時の大漁で、肥料にもしきれずに、腐らされてしまう。漁師の方でも、漁しても無駄骨折だから、魚の群をそのままに見遣してしまふ。

何うしてかやうな始末になるのかといへば、一つは交通運輸の不便、一つは貯藏方法の不備、一つは利廻り本位の商法、かういふ事柄が原因をなしてをる。

天與の恵は機會を失へば再び返り來ることは絶対に不可能である。個人に今日は一生の中一度しかないやうに、自然の機會は時を本位として絶対に唯一度しかない。

普通、天恵云々を口にする人間は、形と物とに囚はれて時を全然無視してをる。交通問題でも貯藏問題でも、或は又利廻り問題でも、物と形とに重きを置いて、時には重きを置かぬのである。

例へば沿岸の人々は盛に築港若くは鐵道敷設を叫ぶ。けれども一人として沿岸航

路の汽船の速力を叫ぶ人間はない。又魚類貯藏の目的を高値本位に考へる人間はあ
るが、時を通じて廣く分配される道を考へる手合はない。商法は利廻りなしには營
めぬ。けれどもその利廻りは單に投資の利廻りで、時を本位とした人間努力の能率
の利廻りではない。

以上三つを一括して考ふれば、矢張結局は、資力に對する配當問題に歸着する。
資力に對する配當は金だ。その金が何の働をするのかといへば、實際、高利に依つ
て、多數の人間の血を吸ふ道具にしかならぬ。

金は資本として、交通の設備にも役立ち、貯藏の方法も整へ、又利益を産み出す
元にもなる。併し金は直接食糧には絶対にならぬ。勿論又人間の血にもなぬ。却て
それは血を搾る道具化する。國家はそれを、民族の血の保全のために、絶対に豫防
する必要がある。國家の務むべきはその金を生産の元とする點である。

要するに鎖國の固定的、他動的、若くは寄生的社會生活の因習に囚はれ來たれる

日本の町村を、自由な移動的、主動的、若くは自主的社會生活組織に進化さす道に努力と工夫とが民族的に向け更へられることが、少なくとも食糧問題を本位として、現下の第一義と考へられる。

第八節 都市問題

日本社會には都市はない。之が日本の都市に對する外人評である。その標準は交通道路だ。日本の都市といふ都市の道路は、田圃か泥田であるとの評であるのである。

勿論、その道路を標準とせずとも、日本には元來都市はない。その根本原因は、封建瓦解後日尙は淺く、四民平等といふ維新はあつても、まだその理想の實現は、實際一步も完全には進んでをらぬ有様であるからだ。

都市の生命は自由である。自由の民の造り上げた社會の組織に、都市の生命は活

きて行く。日本に自由の民があらば都市なしとの評は意義がある。併し自由の民など日本には絶對にない。都市のないのが當然である。

普通、史上に見ゆる封建の瓦解は、市民の勃興を意味してをる。さうして、貴族社會の組織の破壊が、初めて自由市民の社會組織の元を造つて行く。

日本は、現在何うかといへば、形式上では封建は瓦解された。併し徳川幕府に替つて薩長二藩が覇權を握つた。王道に政治を復したとは名ばかりで、實は大なる覇道的政治である。

市民の勃興も形ばかりで、全くその内容は嘘である。所謂市民なるものは、專制的な形式の下に、物質本位に、その日を送つてをる。自由精神、若くは自主精神の發生するのは、まだく遠い。日本には、まだ社會に、自己發見の機會が到來してをらぬ。それが他動的に、日本の社會一般が、日を送る根本原因である。

一口にいへば、日本の都市は生命がない。日本の都市は、見様に依れば、人間の

墓場である。都市は日本では都會である。唯、都戀しさにあこがれ行く人間が、集まり合つてをる場所である。

人間に自由の生命があるでもなければ、又社會生活の統一された中心もない。全くの墓場、民族の暖い血など、日本の都會の何所を探しても流れてはをらぬ。

昔は武士が二本刀で支配して、人民の自由を拘束したその跡が、今日ではサーベルと銃とで支配されてをる。今日の都會は、如何に道路は田圃のやうに不完全でも、交通は昔とは違つてをる。随て移動の自由は、比較にならぬほど進歩してをる。憲兵は勿論のこと、普通の警官にも、飛道具を持たせるといふ風である。

民族の血は、日本の都會を標準とすれば、到底暖く維持保全されさうな譯はない。墓場といふ二字は、日本の都會に好適であらう。

假に例を日本の帝都に取る。こゝは江戸城の下に徳川幕府が、三百諸侯の家族を人質に取つて、榮華を極めた跡である。今日では、その跡は東京の名の下に、中央

集權の中心地帯である。

その東京を實際に目撃すれば、自由の生命を保つ人間が、誰一人としてあるであらうか。畏多しと人はいふ。確にさうである。上は天子より下は乞食に至るまで、自由の生命を本位とすれば、全然均一平等である。

人は死すれば王侯匹夫差別はない。共に天に返つて神となり得るからである。帝都はその意味に於ける墓地と見て差支あるまい。

明治維新を更始一新の新紀元として、帝都と更められたかの觀ある東京は、實は一時行幸の意味に止まつたとは、隠れなき事實である。未だ一度も遷都の勅語を日本民族は拜してをらぬ。

一時の行幸、而かも關東々北の人心緩和のための行幸であつたといふ。それには徳川の腐つた城趾も行在所として忍ばれぬものでもない。けれども昭和の今日は己に明治から三代を數へ得る。腐つた徳川幕府の城趾を、民族の血の中心として定む

るには、文字の通り、畏多い事柄である。

さうして、その帝都の實狀はといへば、冷たい劍で民族の血は脅かされてをる。言ふ勿れ、帝都の内外には不逞な血に渴した悪漢が群がりをる。それらの群徒は悉く征服者の立場に立つて、日本民族の自由を拘束した、昔ながらの覇權の賊の子孫ではないか。

明治維新の大義を忘れ、日本を邪道に陥れた覇權の賊は、七百年來幕政の下に祟られた、日本國民の心に潜む、專制的差別の心理である。この心理は、維新の大義に本づく、四民平等の理想實現に依つて取除かれる。それが日本民族の血の保全に對する最大必要條件である。

第九節 墓地問題

墓地は麗はしい。殊に自身の血を分けた人間の墓地に對しては、麗はしくも泣か

ずにはをれぬが人情である。

けれども血は枯骨には宿らぬ。又靈は死には活きぬ。如何に遠き祖先の血も、現在活きつゝある人間の身にしか活きぬ。祖先の靈の宿る所は、即ち現に今麗しく感じつゝ、墓に對して泣く、自身の心の外にはない。

昔は西洋の宗教が、神を偶像から解放して、人間の心に活かし、基督を人格の對象とした。英國人民に向つて、この眞理を説いて、自主觀念の本を立てたのは、確にジョン・コレットの偉大なる達觀であつた。

けれども英人といへども、尙ほ近き祖先の靈に對しては、偶像崇拜者たるを失はぬ。尤も墓は、縦令死者の靈に對する記念の如くにして、その實は死者自身、生前之を設くるものもある。恐らくその意は自己を後世に延長するにあるのであらう。

併し思はざるの甚だしいものといひ得る。人間が石に化けて、後世に自己を延長するなど、愚の至りである。若し後世に自己を延長して、後世の人に記憶されたく

ば、生前それだけの事をするに限る。人は生命の自己延長に依つてのみ、自己を後世に記念せしむることが出来る。

日本の例によくあることは、墓が一定の型に造らせられてある。面白い工夫と思ふて、その理由を質してみれば、非常の際に壘を築く石材用だといふ。封建時代の藩の墓地に見る事柄である。

死者の化石した記念物が、非常の際の防備に役立つのは馬鹿にはならぬ。けれども、溝石、踏石などに變じてをるのを目撃すれば、墓も永久死者を後世に活かすものとは考へられぬ。或人はかういつてゐた。墓石丈けは自分は要らぬ。死んでも自由に戻りたい。重い石など真平だど。蓋し意味がある。

一體過去の宗教の進化に鑑みてみれば、神を心に活かして行く行方が、真に一身の主を見出す行方に取れる。偶像崇拜は、自己没却、他動的な行方である。専制君主の道具としては、確に有利な仕方であらう。併しながら、自由に活きる人間の行

方では決してない。

翻つて考ふれば、祖先の靈、父母の靈、否近ける血縁の靈をして、現在活ける人間の心に宿らせる觀念こそ、民族の血を保全して、後世に傳ふべき責任の自覺ある人間の正に爲すべき務であらう。この意味からいへば、偶像を撤廢した過去の宗教の進化の路は、尙ほ一步進んで、祖先の靈を偶像化する觀念をも改むるに至るであらうと思はれる。

日本は民族の血の統一から考へて、上には伊勢の大廟を戴き、下には各地に氏神の社を有つ。さうして宗教からは差別して、一に國土民族の記念物かの觀がある。この社を尙ほ一步進めて意義あらしめ、民族の靈の記念として、統一的に現在の習慣たる墓石に代へることが適當のやうに思はれる。

日本は活社會の民族の上にすら、四民平等、自然の愛の至情を以て、民族的血の中心に歸一せんとする理想に活きる。死者の靈を歸一せしめて、四民平等の實を國

土民族の記念に留むるは、民族の血の保全の上に、實際的效果を齎らすものと考へられる。

日本は國土の狹隘を感じてをる。その國土を死土に化するは、國を亡ぼし、血を涸らす本である。國土に生命を與へ、民族の血を維持するためには、國土を墓地より救ふのが、極めて大切な事柄と思ふ。

墓に對する國民の思想は、極めて深刻なものがある。併しそれは宗教的な過去の習慣といひ得ぬことはない。今日の宗教は、その事實の證明するやうに、それ自身枯骨の觀を呈してをる。

この宗教を復活せしむる必要あらば、宗教そのものをして、活ける現實の人間の心に、血と共に復活させる必要があらう。墓場の番には宗教は活きぬ。

第十節 土地問題

民族の血を本位としていへば、土地問題は單純な土地問題としては考へられぬ。單純な土地問題とは、地主小作間の耕作に關する土地、若くは國有私有の土地の問題である。一口にいへば、土地と所有權との問題がそれだ。

けれども、民族の血と關係しての土地の問題は、寧ろ思想に重きを置いて考へられねばならぬ。例へば墳墓の地とか、或は祖先の國土とか、さういつた土地問題は思想本位に考へられて、初めて意義を有つ。

今一例を擧げて日本民族の土地問題を思想上から考へて見る。日本は神國だといひ、或は神ながらの國だとかいふ。幕末維新に際して、所謂攘夷家が赤毛人に國土の神聖を汚させぬと騒いだのは、その神國の日本民族思想からであつた。是非善惡の問題でなく、言はゞ固有の民族的本能の至情の問題である。

今日は己に時勢が違ふ。土地は單なる個人的若くは社會的所有の目的物の觀念に支配されて、日本の國土を神聖だなどと、本能的に守る至情の人間があらば、それ

こそ狂人扱ひされるに相違あるまい。併し日本民族の血の問題を本位として来れば、まだなか／＼さうはいひ得ぬ。物を離れて、絶對な生命が、自由の立場に於て人間を支配して来るからである。

日本國土を本位として、今日日本が最も憂とする所のものはといへば、世に所謂赤化思想であらう。赤化思想は、以前日本社會に流行した、歐化思想の名の變つたものである。

一般に形に囚はれて、自己を破壊する行爲の本を、赤化思想若くは歐化思想と稱へる。凡て新しい思想である。幼稚なものが、人の持つものを見て、持ちたがるやうに、低い文化の人間が、高い文化に觸れた場合は、必ず自分を棄て、他に囚はれて自己破壊を行ふのである。それは恐らく人間の本能的自然であらう。弱いものは、周囲の環境に支配されて、保護色を發揮し、自己を破壊するのが自然である。自己の發見の出來ぬ間は、何時までも、同じことを繰返す。歐化思想、赤化思想、

曰く何曰く何、次から次へと新しい思想が出る。

以前歐化思想の盛な場合には、その反動として國粹思想が盛んであつた。今日赤化思想の反動としては、國本主義などいふ思想が出て來てをる。その本位は日本國土にある。日本國土の神聖擁護にあることは明かである。

併しながら、以前には國粹思想、今度は國本主義といふやうに、新しい思想の形式に刺戟されて起つて來る、新しい反動思想は、如何なる性質のものかといへば、結局、一口にいへば、己を知らぬ性質である。

日本の土地は、まだ自己を發見してをらぬといふことが、思想の衝動の起る根本原因である。かゝる思想の衝動は、日本の如き土地に於ては、一朝一夕に消滅はせぬ。消滅したかと思へば、また何かの形や名に依つて出現する。土地そのものが、新たな環境に接する毎に起して來る、何のことはない、ヒステリックな自己破壊である。